フェスティバル/トーキョー15
事業実績報告書 2016.3

Festival/Tokyo 2015 Activities and Results Report March 2016

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局　〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎　TEL:03-5961-5202　FAX:03-5961-5207
Festival/Tokyo Nishi-Sugamo Arts Factory 4-9-1 Nishi-Sugamo, Toshima-ku, Tokyo 170-0001 Japan Tel: +81(0)3-5961-5202 Fax: +81(0)3-5961-5207 festival-tokyo.jp

発行:フェスティバル/トーキョー実行委員会　編集:フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局　デザイン:市川きよあき事務所・片山えり子　印刷:三伸印刷　発行日:2016年3月10日　禁・無断転載　©フェスティバル/トーキョー実行委員会

目次

1 概況 [p.2]

2 フェスティバル/トーキョー15を振り返って
ディレクターズコミッティ代表　市村作知雄 [p.4]

3 記者会見およびトークイベント [p.6]

4 シンポジウム 『アートフェスティバルの展望』 [p.7]

5 事業報告詳細
- 5-1 主催プログラム [p.8]
- 5-2 主催企画 [p.16]
- 5-3 関連イベント [p.19]
- 5-4 人材育成プログラム [p.20]

6 同時開催 アジア舞台芸術祭 2015 [p.22]

7 連携プログラム [p.24]

8 広報、宣伝 [p.26]
- 8-1 メインビジュアル
- 8-2 宣材
- 8-3 ウェブサイトおよびSNS
- 8-4 掲載実績、広告換算費
- 8-5 その他

9 収支、来場・参加者数、チケット・営業 [p.28]
- 9-1 F/T15収支
- 9-2 来場・参加者数
- 9-3 チケット

10 開催スケジュール [p.30]

11 開催概要 [p.32]
クレジット一覧

Contents

1 Overview [p.3]

2 Looking Back at Festival/Tokyo 2015
Sachio Ichimura, Directors Committee Representative [p.5]

3 Press Conference and Talk [p.6]

4 Symposium: “The Future of Arts Festivals” [p.7]

5 Festival Activities
- 5-1 Main Program [p.8]
- 5-2 Related Events [p.16]
- 5-3 Satellite Events [p.19]
- 5-4 Training Program [p.20]

6 Asian Performing Arts Festival 2015 [p.22]

7 Affiliated Program [p.24]

8 Publicity & Promotion [p.26]
- 8-1 Graphic Design
- 8-2 Publicity Material
- 8-3 Website & Social Media
- 8-4 Press Coverage & Advertising Value
- 8-5 Others

9 Earnings & Expenditure, Audience & Participant Numbers, Tickets [p.28]
- 9-1 F/T15 Earnings & Expenditure
- 9-2 Audience & Participant Numbers
- 9-3 Tickets

10 Festival Schedule [p.30]

11 About [p.32]
Credits

1 概況
Overview

2009年に誕生した国際舞台芸術祭「フェスティバル/トーキョー」（以下、F/T）は、日本国内で最大規模かつ国際水準の舞台芸術フェスティバルとして、同時代の優れた舞台作品の製作・上演を軸に、無料の野外イベント、トーク、映画上映など多彩なプログラムを展開。舞台芸術の魅力を多角的に提示し、国境、世代、ジャンルを超えて多様な価値が出合い、新たな可能性を拓く場となることを目指している。また、東京、そして日本の舞台芸術シーンを活性化し、国内外の劇場・文化機関・フェスティバルとのネットワークの構築と文化交流の促進に取り組むものでもある。

8回目の開催となったF/T15は、これらの基本的なミッションと方向性を受け継ぎつつ、フェスティバル/トーキョー実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン、アーツカウンシル東京・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）が主催。文化庁による助成、アサヒビール株式会社、株式会社資生堂の協賛に加え、豊島区の地域団体をはじめとする多くの企業支援のもと、2015年10月31日（土）～12月6日（日）の37日間にわたって、豊島区・池袋エリアの東京芸術劇場、あうるすぽっと、にしすがも創造舎、池袋西口公園、豊島区 旧第十中学校、アサヒビール株式会社から提供されたアサヒ・アートスクエアにおいて12演目3企画を実施した。

主催プログラムでは「融解する境界」をテーマに、日本と西欧の舞台芸術シーンを牽引する演出家たちによる作品を製作・上演。また、国際交流基金との協働により昨年から開始したアジア・シリーズの第2弾では、国際交流基金アジアセンターとの共催で急速な社会変化を続けるミャンマーを特集。その他、アートフェスティバルの展望を考えるシンポジウムやポーランド、マレーシア、中国の舞台芸術の現在を紹介するトーク、豊島区庁舎や図書館を活用した展示など、多彩なプログラムを展開した。また、連携プログラムとして9～12月に都内および東京近郊で開催された18の公演がF/Tに参加したことに加え、同時開催されたアジア舞台芸術祭とも広報連携を行い、東京の舞台芸術シーンを広く発信した。

F/T15ののべ観客数は、55,624人であった。このうち、主催公演は34,612人で、前年比で8,011人の増加であった。財政面では、文化庁助成金が枠組みの変更に伴って減額となったことから、例年に増して厳しい予算状況での運営となった。

また、人材育成を舞台芸術シーン全体の重要な課題と考え、インターンシップ・プログラムを実施し28名を受け入れたほか、パイロット事業としてF/Tキャンパスを実施。加えてアジア舞台芸術祭における「APAFアートキャンプ（舞台芸術国際共同製作人材育成事業）」を共催した。

さらに、今年も多くのボランティア・スタッフがフェスティバルを支えた。より幅広いフェスティバルへの関わり方を提供すべく、ボランティア・スタッフの制度と名称をリニューアル。「F/Tサポーター」として登録した258名が、会期中の運営補助だけでなく、プログラムへの参加や自主企画による活動など年間を通した活動を展開した。

The international performing arts event Festival/Tokyo (F/T) launched in 2009 as the largest such festival in Japan and one to match the standard of other global performing arts festivals. It presents superb examples of contemporary performing arts, both newly commissioned work and outside productions, as well as free outdoor events, talks, film screenings, and a host of other events in its vibrant programming that aspires to convey the multi-faceted appeal of the performing arts and provide opportunities to encounter diverse values that transcend nationalities, generations, and artistic fields and genres, as well as open up new possibilities for the arts. The festival also aims to be an energizing force in the performing arts scene in Tokyo and Japan, and work toward fostering cultural exchange and constructing a network of domestic and international theatres, cultural agencies and festivals.

F/T15 was the eighth iteration of the festival and, continuing the fundamental mission and direction of its predecessors, was organized by the Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ), and Arts Council Tokyo and Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), with support from the Agency for Cultural Affairs, and sponsorship from Asahi Breweries, Ltd. and Shiseido Co., Ltd., along with assistance from many corporations and bodies, including local ones in Toshima City. Held over 37 days between October 31st and December 6th, 2015, at Tokyo Metropolitan Theatre, Owlspot Theater, Nishi-Sugamo Arts Factory, and Ikebukuro Nishiguchi Park in the Ikebukuro area of Toshima City, as well as Asahi Breweries' Asahi Art Square and other venues, the festival featured 12 productions and 3 event programs.

The theme of the Main Program was "border fusion", producing and presenting work by leaders of the Japanese and western European theatre scene. In partnership with the Japan Foundation Asia Center, the festival followed on from last year's debut Asia Series by programming a second showcase, this time focussed on the rapidly changing nation of Myanmar. Other events and programs included a symposium exploring the future of art festivals, talks about current performing arts trends in Poland, Malaysia and China, and an exhibition at Toshima City Office and Toshima Central Library. The F/T Affiliated Program curated 18 other productions taking place in the Tokyo area between September and December, which joined the festival and the concurrent Asian Performing Arts Festival as PR partners widely publicizing the Tokyo performing arts scene.

Total audience numbers for F/T15 were 55,624. Events in the Main Program were attended by 34,612, an increase of 8,011 over last year. Financially, subsidy from the Agency for Cultural Affairs was reduced due to changes to the funding structure, which meant the festival operated under stricter budgetary conditions compared to previous years.

F/T also regards training as an important issue in the performing arts scene in Japan. As such, the festival organized an internship program with 28 participants and also the pilot scheme of F/T campus, as well as co-presenting APAF Art Camp (Performing Arts International Collaboration Intensive Course) as part of Asian Performing Arts Festival 2015.

Finally, the festival was once again supported by the efforts of numerous volunteers. In order to offer broader ways for people to be involved with the festival, the volunteer staff system was renamed and revamped into a year-round program. 258 people registered as F/T Volunteer Supporters, not only assisting with management tasks during the period of the festival, but also taking part directly in some of the events at F/T15 and organizing their own projects.

©Kato Kazuya

©Kato Kazuya

©Hideto Maesawa

2 フェスティバル/トーキョー15を振り返って

ディレクターズコミッティ代表　市村作知雄

今回も、昨年に引き続き「境界」を通底する言葉とした。おそらくは、次回も引き続きそうなると考えている。作品の評価、あるいは好みも「溶けだした境界」のように不安定となっている。作品にとって、賛否両論が好ましいのかもしれないが、そんな賛否という二分法で語られるほど我々の現在は単純ではない。自分が素晴らしい作品だと評価しても、隣の観客はブーイングだということを目の当たりにすることは、一種楽しい体験でもある。多様性とは、作品が多様な価値を提示するとともに、観客の見方をも多様に変えてしまうが、さしあたっては、自分の見方とはまったく異なった見方をしている他人がいることを認識できることは喜ばしいことだし、なぜそのようなことが起きるのか、自分と違った見方とはどんなものなのかをゆっくり考えたり、話し合ったりできればなおいいのだと思う。寺山修司にとって、観客はエンドユーザーではなく、共犯者だったが、我々はもう少し先の答えを探そうとしている。見終わったあとに行って語れる静かな酒場を用意したいものだ。

それはさておき、まずは観に来られた観客やアーティスト、技術者の皆様に心より御礼申し上げたい。また我々を支え続けてくれた多くの組織、機関、企業、劇場関係者にも御礼とともに、今後一層の信頼関係を築く努力は惜しまない決意である。特に豊島区役所の職員の方々には、会場設営から事務局の運営まで、我々のいたらぬところを様々な局面でサポートしていただいたことを報告しておきたい。さらに血と知の結晶のような努力を惜しまずフェスティバルの成功をめざしてくれた事務局のスタッフ、インターン、サポーターの方々にこの場をかりて心よりの感謝を伝えたい。でも、先はまだまだ遠く、闇も一層深いので、土を耕し、木を植え、灯りを点ける努力をしつづけよう。

今回も『フェスティバルFUKUSHIMA!@池袋西口公園』で開けた。恐れていた天候にも恵まれ、東北の震災の中から生み出された作品に敬意を払い続けたい。同様に飴屋法水作・演出、福島県立いわき総合高校の卒業生たちが演じた『ブルーシート』は、現実の持つ衝迫力に圧倒されるものだった。時とともに内在化される体験が、彼らの中で何を生成するのか、期待したい。宮城聰演出、野田秀樹潤色、SPAC - 静岡県舞台芸術センターの『真夏の夜の夢』は、子どもから大人まで十分に楽しめる作品で、今後とも家族で楽しめる作品を継続すべきだと感じた。岡田利規作・演出『God Bless Baseball』は、韓国と共同製作で、アメリカ、韓国、日本の関係を野球を比喩として語ったものだが、「未来を想像すること」を強く警告していて、岡田の視線の先を読み解く楽しみを感じた。ソン・ギウン作、多田淳之介演出の『颱風奇譚 태풍기담』は、日韓の関係を語ることの難しさを体現している。マヤコフスキー作、三浦基演出、空間現代音楽の『ミステリヤ・ブッフ』は、音楽、言語、身体が拮抗する緊張感が魅力を引き出し、難解な戯曲を扱う演出家の手腕が冴えわたった。問題作、ゾンビオペラ『死の舞踏』は、安野太郎を中心に渡邊未帆、危口統之の共同作業で創られた。オーケストラ、歌、芝居が統合されオペラという形式が守られながら、まったく別次元の作品となっている。冒険せよ!をまさに体現している。このようなチャレンジは望むところだ。

アンジェリカ・リデル作・演出の『地上に広がる大空（ウェンディ・シンドローム）』は、驚くほど評価の割れた作品である。猛烈なブラボーとともに、「このようなものを招聘する見識を疑う」との反応が入り乱れ、これこそがプロデュースする醍醐味である。今回非常に嬉しかったのは、否定する意見がしっかり出てきたことである。ともすれば主催者やアーティストの下には褒め言葉しか届いてこないものだが、反対意見が出ることは、反対するだけの価値を認めたからで、無視が、一番辛い。もちろん全員が賛成することなど望んではいない。パリ市立劇場『犀』は同劇場ディレクター、エマニュエル・ドゥマルシー=モタ演出で、難解な作品をわかりやすく創る腕の確かさを見ることができた。パリで起きたテロの直後で、世界の混沌が身近に迫っていることが実感された。追悼。ギンタースドルファー/クラーセン『LOGOBI 06』は強靭なダンサーの肉体と言語の力が拮抗するスタイルを成功させている。ゲーテ・インスティトゥート韓国とNOLGONGによる、ピーター・リー構成『Being Faust - Enter Mephisto』は、観客参加型の作品で、参加者の性格が表れる楽しい作品に仕上がっている。このような作品は今後も必要である。

アジアシリーズはミャンマー特集で、演劇、映画、インスタレーション、クラブと多彩なプログラムとなった。まさにこの特集をやっている最中にアウンサンスーチー氏の政党が政権奪取することがおこり、アジアの変化を感じさせるものとなった。我々の中で、アジア特集をやる意味が急速に新しい輪郭をもち始めている。やって行く中でしか理解できないことがほとんどである。

シンポジウム、講座などの企画は、前回と比べても格段に充実してきた。そのうち公演事業と肩を並べるほどになって、大きな展開を遂げることを期待している。

市村作知雄

1949年生まれ。ダンスグループ山海塾の制作を経て、トヨタ・アートマネジメント講座ディレクター、パークタワーホールアートプログラムアドバイザー、㈱シアターテレビジョン代表取締役を歴任。東京国際舞台芸術フェスティバル事務局長、東京国際芸術祭ディレクターとして国内外の舞台芸術公演のプログラミング、プロデュース、文化施設の運営を手掛けるほか、アートマネジメント、企業を文化を結ぶさまざまなプロジェクト、NPOの調査研究などにも取り組む。現在、NPO法人アートネットワーク・ジャパン会長、東京藝術大学音楽環境創造科准教授。

Looking Back at Festival/Tokyo 2015

Sachio Ichimura, Directors Committee Representative

As in 2014, once again I went for a theme connected thoroughly to the concept of borders. In all probability, this will also continue in the next festival. Tastes and the evaluation of work are unstable, like borders that have dissolved. For a work of art, dividing opinion is perhaps somewhat agreeable, though our present-day situation is not one that can be so easily discussed in binaries of like or dislike. That being said, witnessing how the person next to you boos a performance you enjoyed is a kind of fun thing to experience. Diversity is both presenting diverse values in art and also diversely changing audience perspectives, though for now it would make me happy just if audiences are able to recognize that there are others with completely different ways of seeing, and if the festival makes them think carefully about and discuss why there are differences and what kinds of differences there are, then that would be even better. For Shuji Terayama, the audience wasn't the end user but an accomplice, though our search is for an answer that lies a little further ahead. I want to create a place to drink quietly, where audiences can go after a performance to discuss what they saw.

That aside, I first of all want to express my heartfelt thanks to all the festival's audiences, artists, and technicians. Along with also thanking the many organizations, bodies, corporations, and theatre professionals who have continued to support us, I am determined to spare no effort in constructing stronger relationships of trust in the future. In particular, numerous people at Toshima City Office gave us a full range of support, from arranging venues to administration. I also wish to express my gratitude to the festival staff, interns and volunteers who worked so hard for the success of F/T15. But we still have far to go and the night is dark, so we will continue our efforts to till the soil, plant the seedlings, and light the lamps.

This year we opened again with "Festival Fukushima! @Ikebukuro Nishiguchi Park", blessed this time with good weather. I continue to respect this event born out of the 2011 Tohoku disaster. Similarly, "Blue Tarp", written and directed by Norimizu Ameya and performed by former students from Fukushima Prefectural Iwaki Sogo Senior High School, overwhelmed us with the sheer power of reality. I look forward to seeing what their experiences that will internalize with time will generate within them. Directed by Satoshi Miyagi and "embellished" by Hideki Noda, Shizuoka Performing Arts Center's "A Midsummer Night's Dream" could be enjoyed by children and adults alike, and filled me with a sense of the importance of continuing to program work for families. "God Bless Baseball", written and directed by Toshiki Okada, was a Japanese-Korean co-production, examining the relationship between America, South Korea, and Japan through the metaphor of baseball, but its strong warning about envisioning the future mean I look forward to deciphering where Okada's sightlines are turning next. Written by Kiwoong Sung and directed by Junnosuke Tada, "A Typhoon's Tale" embodied the difficulties of discussing the relationship between Japan and Korea. With a text by Vladimir Mayakovsky, directing by Motoi Miura, and music by kukangendai, the appeal of "Mystery-Bouffe" came out of the tension between the music, language, and bodies all competing with each other, demonstrating the forte of this director in handling difficult texts. Zombie Opera "Danse Macabre" was created by Taro Yasuno in collaboration with Miho Watanabe and Noriyuki Kiguchi. While maintaining the format of an opera in its integration of an orchestra, singing, and drama, it was also a piece of theatre from a whole other dimension. It was a veritable adventure. These are the kinds of endeavors I want.

Angélica Liddell's "All the Sky Above the Earth (Wendy's Syndrome)" was an astonishingly divisive play. Alongside the feverish cries "bravo!" were those who questioned the wisdom of including such a piece in the festival, and herein lies the true thrill of producing a festival. It really made me glad that there were these contradictory opinions this year. While organizers and artists are prone only to hear praise, even if audiences oppose what we do, it is because they acknowledged the value of opposing, and to be ignored is the worst thing. Needless to say, it is not my wish that everyone agrees with what we do. The Théâtre de la Ville-Paris staging of "Rhinocéros" was skillfully directed by that theatre's artistic director, Emmanuel Demarcy-Mota, making a tricky text easy to understand. In the aftermath of the Paris terror attacks, I sensed how the world has plunged into chaos. Gintersdorfer/Klaßen's "Logobi 06" created a successful dance where the tough bodies of dancers vied with the power of language. "Being Faust – Enter Mephisto", produced by Goethe-Institut Korea and NOLGONG, and conceived by Peter Lee, was the only participatory work in the festival this year and was a fun piece that brought out the personalities of the participants. We also need this kind of work for the future.

Our Asia Series program this year showcased contemporary art in Myanmar, featuring theatre, cinema, installations, and club music. Fortuitously, Aung San Suu Kyi's party took power while the program was running, providing a real sense that Asia had changed. For us, the significance of programming this Asian arts showcase has rapidly taken on new contours. Almost everything becomes understood during the process of doing it.

Our programs of symposia, lectures and other related events have also grown richer than ever. I look forward to developing these even further so that they can truly stand shoulder to shoulder with our lineup of performances.

Sachio Ichimura

Born in 1949. He has served as an administrator for Sankai Juku, Toyota Art Management Lecture Director, Park Tower Art Program Advisor, President of Theater TV, Administrative Director of Tokyo International Festival of Performing Arts, and Director of Tokyo International Arts Festival. His long career has seen him work in Japan and overseas in performing arts programming and production, as well as operating cultural facilities, arts management, projects connecting corporations with culture, and NPO research. He is currently Chair of NPO Arts Network Japan, as well as an associate professor in the Department of Musical Creativity and the Environment at Tokyo University of the Arts.

©Junya Suzuki

3 記者会見およびトークイベント

Press Conference and Talk

7/28 (Tue)　会場：東京芸術劇場 シンフォニースペース　来場：88人
Venue: Tokyo Metropolitan Theatre (Symphony Space)　Audience: 88

■ 記者会見

登壇者：
アンジェリカ・リデル、山岸清之進、宮城 聰、多田淳之介、安野太郎、渡邊未帆、市村作知雄

7月28日の情報解禁に合わせて記者会見を開催。スペインから来日中のアンジェリカ・リデルをはじめとする6名のアーティストを交え、F/T15の概要およびラインアップを発表した。会見の冒頭では、ディレクターズコミッティ代表の市村がF/T15のテーマ「融解する境界」や、新たなメインビジュアルについて説明。昨年度の黒を基調とした硬質なデザインから、明るく華やかなイメージへと大きく変貌したビジュアルについては、来場した記者からの要望もあり、急遽、同席したアートディレクターの氏家啓雄がコンセプトや製作過程について語る場面もあった。また、登壇したアーティストからは、各自短い持ち時間ではあったが、フェスティバルでの上演に向けての意気込み、作品の魅力、見どころに加え、作品に対しての思いや創作について聞くことができた。今回が初来日となるアンジェリカ・リデルも、自身の言葉で作品について語り、公演のPRを行なった。

■ Press Conference

Guests: Angélica Liddell, Seinoshin Yamagishi, Satoshi Miyagi, Junnosuke Tada, Taro Yasuno, Miho Watanabe, Sachio Ichimura

On July 28th, a press conference was held to coincide with the release of details about the festival programs. The press conference was attended by six of the participating artists, including Angélica Liddell, who was visiting from Spain, and introduced an overview of F/T15 and its lineup.

The conference began with comments from F/T Directors Committee Representative Sachio Ichimura, who described the “Border Fusion” theme of F/T15 and the new look of the festival, transforming from the darker, hard colors of last year to a brighter, more positive visual style. Attending journalists were interested in this change and art director Yoshio Ujiie stepped in to discuss the concept and design process.

Each of the attending artists had the opportunity to provide a short comment on their contribution to the festival as well as explain directly about their work. Timing the conference with Angélica Liddell’s visit to Japan also helped in publicizing her production when it was staged in the autumn.

■ トークイベント
「2020年にむけて、アートフェスティバルの展望」

登壇者：
市村作知雄
宮城 聰（アジア舞台芸術祭ディレクター）
芹沢高志（さいたまトリエンナーレ2016ディレクター）
吉本光宏（ニッセイ基礎研究所研究理事/東京芸術文化評議会 評議員）

2020年＝東京オリンピック開催に合わせて大規模な文化イベントやフェスティバルが開催されるが、そこにはどのような展望があるのだろうか。アートフェスティバルのディレクターと、文化芸術にかかわる調査研究者が語らうイベントを開催した。冒頭、市村は、この場を結論を出さない会とすると共に、肩書きに縛られない個人の意見を聞く場にしたいと提案した。宮城は1936年のベルリンオリンピックでの「芸術競技」がもたらした多様性の軽視に触れ、フェスティバルが多様性の担保となることを希望すると述べた。芹沢は祭りそのものよりその後に関心を持っており、ポストオリンピックへの布石としての長い目で見た施策が必要とまとめた。吉本は2014年3月に東京都が策定した東京文化ビジョンを紹介すると共に、大規模な芸術祭の開催のビジョンを説明し、さらにF/Tにはこれらに参画しつつも批評的な視線を見失わないでほしいとの意見を述べた。

■ Talk
Arts festivals evolving towards 2020

Guest Speakers:
Sachio Ichimura
Satoshi Miyagi (Director, Asian Performing Arts Festival)
Takashi Serizawa (Director, Saitama Triennale 2016)
Mitsuhiro Yoshimoto (NLI Research Institute, Tokyo Arts & Culture Council)

What are the future prospects for large-scale cultural events and festivals as we move closer towards the 2020 Olympics in Tokyo? This talk featured contributions from several Japanese arts festival directors and an arts researcher. Sachio Ichimura opened the talk by explaining that it would not be able to arrive at full conclusions at such a short event, but nonetheless he hoped the speakers could share their frank personal opinions in ways that go beyond their respective official roles. Satoshi Miyagi touched on the contempt for the diversity offered by art competitions that were formerly part of the Olympic Games, and stated his hope that festivals would always maintain diversity. Takashi Serizawa expressed interest not so much in the festival itself but in what comes after, suggesting that long-term policies are needed that offer strategies for the post-Olympic period. Mitsuhiro Yoshimoto introduced the Tokyo vision for culture that Tokyo Metropolitan Government created in March, as well as explaining a vision for holding large-scale arts festivals and commenting how he hoped F/T would continue to participate in this without losing its critical perspective.

4 シンポジウム『アートフェスティバルの展望』

Symposium “The Future of Arts Festivals”

10/30 (Fri)　会場：豊島区役所 としまセンタースクエア　来場：テーマ1 59名、テーマ2 64名
Venue: Toshima City Office (Toshima Center Square)　Audience:Session1 59, Session2 64

■ テーマ1：「東京におけるアートフェスティバルの展望」

パネリスト：
加藤種男（公益社団法人企業メセナ協議会 専務理事）
桃原慎一郎（東京都生活文化局次長）
吉本光宏（ニッセイ基礎研究所研究理事/東京芸術文化評議会 評議員）
渡邊浩司（豊島区副区長）
進行：市村作知雄

7月28日に開催したトークイベントに続き、パネリストに文化行政や企業メセナの第一人者を迎え、それぞれの知る事例をもとに、2020年の東京オリンピックの文化プログラムのあり方、今後のアートフェスティバルの展望について語り合った。

東京都のオリンピック誘致活動を発端に始められた文化事業の成果と今後の展開を説明した桃原に続き、吉本はロンドンオリンピックの事例を踏まえつつ、東京の文化芸術の目指すべきところ、進行中のプロジェクトの評価にも言及した。また、渡邊は豊島区の国際アート・カルチャー都市構想を紹介。自治体の立場から、2020年代の池袋が文化の中心となることへの期待を語った。また、加藤は、企業が文化活動に使っている金額が文化庁予算に匹敵することに触れ、さらなる規模拡大を目指すとした。オリンピック文化プログラムのみならず、以降の展望についても議論は及び、とりわけ人材が継続できる仕組みや制度作りの必要性が強調された。

■ Session 1: The Future of Arts Festivals in Tokyo

Panelists:
Taneo Kato (Executive Director, Association for Corporate Support of the Arts)
Shinichiro Momohara (Deputy Director, Bureau of Citizens and Cultural Affairs, Tokyo Metropolitan Government)
Mitsuhiro Yoshimoto (NLI Research Institute, Tokyo Arts & Culture Council)
Hiroshi Watanabe (Vice Mayor, Toshima City)
Moderator: Sachio Ichimura

Following on from the preview talk on July 28th, this symposium welcomed leading figures from cultural policy and corporate sponsorship of the arts to draw on their knowledge of past case studies and discuss cultural programming ahead of the 2020 Tokyo Olympics as well as the future of arts festivals in the city. Shinichiro Momohara commented on the results and prospects of the cultural initiatives started as part of the campaign to attract the Olympic Games. Mitsuhiro Yoshimoto examined the example of London when assessing the direction arts and culture in Tokyo should aspire to as well as projects currently in progress. Hiroshi Watanabe introduced Toshima City’s international art and culture city vision, expressing hope that in the 2020s Ikebukuro would become a center of culture in Tokyo. Taneo Kato touched on how corporate sponsorship of the arts actually rivals the level of government funding and that the scale of sponsorship will likely expand further. He emphasized that any debate about the future of the arts should not be limited only to Olympic cultural programs, but must also engage with building systems and frameworks for cultivating sustainable human resources.

■ テーマ2：「これからのアート」

パネリスト：
毛利嘉孝（東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科准教授）
長島 確（ドラマトゥルク）
長津結一郎（NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所代表理事）
羊屋白玉（「指輪ホテル」芸術監督、劇作家、演出家、俳優）
進行：市村作知雄

障害者と健常者、つくり手と観客、劇場と劇場ではない場所など、さまざまな境界を探求する実践者、研究者を迎えて、これからのアートの姿をめぐるシンポジウムを開催。長津は、障害者のアートをめぐる2つの方向性―カテゴライズされた「障害者のアート」を振興する動きと、関係性の中から生まれるものをアートとする動きを紹介しつつ、小さな声に耳を傾ける必要性を語った。既存の演劇のシステムから離れた活動を展開する羊屋は、街や多様な人々と向き合いつつ展開するプロジェクトなど、これまでの自身の活動を紹介。長島も、河川敷や民家など劇場ではない場所での上演に関わってきた経験をもとに、観客の体験の変化、劇場から離れた上演の困難と可能性について述べた。ジャック・ランシエールの著書「解放された観客」を引いて作る人と見る人の新たな関係に触れた毛利は、アートを考えるにあたり、むしろ「今アートが回収できないものとは何か」を考えるべきと指摘した。

■ Session 2: Art from Now

Panelists:
Yoshitaka Mouri (Associate Professor, Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts)
Kaku Nagashima (Dramaturge)
Yuichiro Nagatsu (Research Laboratory for Dialogues and Arts of Diversity and Divisions [NPO])
Shirotama Hitsujiya (Artistic Director of YUBIWA Hotel, playwright, director, actor)
Moderator: Sachio Ichimura

This symposium welcomed leading practitioners and researchers investigating the borders between the able-bodied and disabled, artists and audiences, and theatre and non-theatre spaces. Yuichiro Nagatsu introduced case studies from initiatives promoting disability in the arts and attempts to transform what is born out of a relationship into art, and also commented on the necessity to listen to these quieter voices. As an artist, Shirotama Hitsujiya has worked to transcend conventional theatre systems and introduced some examples of her own activities, including projects that brought a range of people and communities together. Kaku Nagashima also drew on his experience staging theatre in places outside regular theatre spaces, such as in folk houses and at riversides, to discuss changes in audience experience, and the difficulties and possibilities of staging work beyond the theatre. Yoshitaka Mouri cited from Jacques Rancière’s “The Emancipated Spectator” to explore new relationships between creator and viewer, suggesting that when we consider art we need to ask what is the thing that art cannot today recover.

5 事業報告詳細

Festival Activities

5-1 主催プログラム　Main Program

主催プログラムでは、「融解する境界」をテーマに、日本の舞台芸術シーンを牽引する演出家たちによる、国境を越えたパートナーシップに基づく共同製作や、異なる分野で活躍するアーティストがコラボレーションする舞台作品、東日本大震災の経験を経て生みだされた表現に目を向けた作品など12演目を上演した。

The F/T15 Main Program featured 12 productions on the theme of “Border Fusion”,focusing on co-productions based on transnational partnerships by leading Japanese stage directors, as well as collaborative works by artists from different fields and art born out of the experience of the Great East Japan Earthquake.

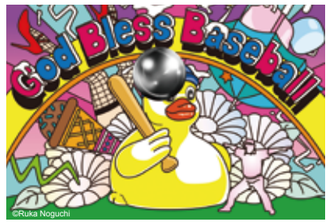
1 『フェスティバルFUKUSHIMA!@池袋西口公園』
“Festival Fukushima! @Ikebukuro Nishiguchi Park”

2 SPAC – 静岡県舞台芸術センター『真夏の夜の夢』
Shizuoka Performing Arts Center（SPAC）“A Midsummer Night’s Dream”

3 ゾンビオペラ『死の舞踏』
Zombie Opera “Danse Macabre”

4 地点×空間現代『ミステリヤ・ブッフ』
Chiten + kukangendai “Mystery-Bouffe”

5 『ブルーシート』
“Blue Tarp”



6 『God Bless Baseball』
“God Bless Baseball”

7 富士見市民文化会館 キラリふじみ『颱風奇譚（たいふう） 태풍기담』
Cultural Centre of Fujimi City, KIRARI FUJIMI “A Typhoon’s Tale”

8 『地上に広がる大空(ウェンディ・シンドローム)』
“All the Sky Above the Earth（Wendy’s Syndrome）”

9 パリ市立劇場『犀（サイ）』
Théâtre de la Ville-Paris “Rhinocéros”

10 ギンタースドルファー/クラーセン『LOGOBI 06』
Gintersdorfer/Klaßen “Logobi 06”

11 ゲーテ・インスティトゥート韓国 × NOLGONG『Being Faust – Enter Mephisto』
Goethe-Institut Korea + NOLGONG “Being Faust – Enter Mephisto”

12 アジアシリーズ vol.2 ミャンマー特集『ラウンドアバウト・イン・ヤンゴン』
Asia Series Vol.2: Myanmar “Roundabout in Yangon”

1 『フェスティバルFUKUSHIMA!@池袋西口公園』

総合ディレクション：プロジェクトFUKUSHIMA!+山岸清之進

“Festival Fukushima! @Ikebukuro Nishiguchi Park”

Direction: PROJECT FUKUSHIMA! + Seinoshin Yamagishi

10/31（Sat）15:00 – 20:00
11/1 （Sun）13:00 – 18:00
池袋西口公園
来場：20,866名
Ikebukuro Nishiguchi Park
Audience: 20,866

2011年の東日本大震災をきっかけに「福島」をポジティブな言葉に変えていこうと始動した「プロジェクトFUKUSHIMA!」とF/Tが共にディレクションした『フェスティバルFUKUSHIMA!@池袋西口公園』。昨年に引き続きフェスティバルのオープニングとして2日間に渡って開催された。大風呂敷が敷き詰められた会場では、大友良英スペシャルビッグバンドやプロジェクトFUKUSHIMA!盆バンドの生演奏による盆踊りに加え、遠藤ミチロウや二階堂和美、そしてF/T参加アーティストの空間現代や安野太郎のライブが行われ、さまざまな世代を魅了した。

今年度から始動したサポーター活動は新たな出会いをもたらした。全国から集まった布を使い、一枚ずつ異なったデザインのはっぴを作った「はっぴ作り隊」。夏から秋にかけて豊島区内外の盆踊り大会に参加し「池袋西口音頭」を広めた「盆踊り隊」。そして「大風呂敷修復隊」によって、昨年制作された大風呂敷は補強され、彼らが新たに作成したのぼり旗も会場を華やかに彩った。オープニングアクトを務めた「音楽隊」は、公園内を練り歩き、さまざまな楽器や道具が奏でる音色が会場内に響き渡った。これらの活動は地域との繋がりを深め、よりいっそう多くの人々を祭りの輪へと誘った。

出演者:
大友良英スペシャルビッグバンド、プロジェクトFUKUSHIMA!盆バンド、羊歯明神Jr. 、珍しいキノコ舞踊団、長見 順＋岡地曙裕＋土生“TICO”剛＋佐藤研二、ミカド香奈子、Sachiko M、遠藤知絵、小林裕輔、二階堂和美、遠藤ミチロウ、空間現代、安野太郎、山岸清之進、中崎 透、アサノコウタ、大石 始、としま ななまる、えんちゃん、としまくん、そめふくちゃん

PROJECT FUKUSHIMA! launched in 2011 in the aftermath of the Great East Japan Earthquake as an endeavor to transform “Fukushima” into something positive again. This event brought the music and dance festival to a park in Ikebukuro. After its success as the two-day opening event for Festival/Tokyo 2014, once again a giant *furoshiki* cloth was laid over the ground of Ikebukuro Nishiguchi Park, which then came alive with Bon dancing and live music from the likes of the Otomo Yoshihide Special Big Band. Other performers and participants included Michiro Endo and Kazumi Nikaido, as well as kukangendai and Taro Yasuno, whose work also featured elsewhere in F/T15.

The activities of this year’s new volunteer supporters also led to fresh encounters. A team of people made *happi* costumes using different pieces of cloth collected from all over the country. Another team participated in Bon dances from summer to autumn in and around Toshima City. Finally, a group of “*furoshiki* repairers” reinforced the giant floor cloth that was used last year and also produced new flags to add even more color to the venue. The opening act saw a team of musicians parade around the park, creating unique musical sounds with diverse instruments and tools. These activities enhanced the links between the event and the local community, inviting more people to join in the festival.

Performers:
Otomo Yoshihide Special Big Band, PROJECT FUKUSHIMA! Bon Band, Shidamyojin Jr., Strange Kinoko Dance Company, Jun Nagami + Akihiro Okachi + Tsuyoshi “TICO” Toki + Kenji Sato, Kanako Mikado, Sachiko M, Tomoe Endo, Yusuke Kobayashi, Kazumi Nikaido, Michiro Endo, kukangendai, Taro Yasuno, Seinoshin Yamagishi, Tohru Nakazaki, Cohta Asano, Hajime Oishi, Toshima mascots

完成したはっぴ。はっぴ作り隊から盆踊り隊へのメッセージ付き
The finished *happi* costumes, with messages from the makers to the dancers.

盆踊り隊「池袋西口音頭」マスターワークショップ
Bon dance workshop for learning the Ikebukuro Nishiguchi-themed song.

❷ SPAC – 静岡県舞台芸術センター『真夏の夜の夢』

演出：宮城 聰　　作：ウィリアム・シェイクスピア　小田島雄志訳『夏の夜の夢』より
潤色：野田秀樹　　音楽：棚川寛子

Shizuoka Performing Arts Center (SPAC) “A Midsummer Night’s Dream”

Direction: Satoshi Miyagi Text: William Shakespeare Translation: Yushi Odashima
Embellishment: Hideki Noda Music: Hiroko Tanakawa

10/31（Sat）– 11/3（Tue）
にしすがも創造舎
全5ステージ／来場：1,218名
Nishi-Sugamo Arts Factory
Performances: 5 / Audience: 1,218

演出家、宮城聰が芸術総監督を務めるSPAC – 静岡県舞台芸術センターによって2011年に初演されたヒット作の東京初演。シェイクスピアの恋物語を野田秀樹が潤色、原作には登場しない悪魔、メフィストフェレスを登場させ、言葉とその裏にある深層心理に分け入る祝祭音楽劇。その言葉遊びと、舞台音楽家の棚川寛子がつくりだす打楽器のリズム、大きな世界観を持つ宮城の演出が絡み合い、にしすがも創造舎に「知られざる森」を立ち上げた。静岡芸術劇場から会場を移しての再演であったが、観客と舞台の距離がより近づいたことで、生演奏をはじめとした臨場感あふれる今作の魅力をいっそう強くアピールすることができた。舞台セットを間近で見られるバックステージツアーや、観客同士の感想をシェアする「ワールド・カフェ」などの関連企画も盛り上がりを見せ、幅広い世代の演劇ファンに親しまれる公演となった。

This was the Tokyo premiere of a 2011 production by Shizuoka Performing Arts Center (SPAC), which is led by Satoshi Miyagi. Based on Hideki Noda’s “embellished” version of the Shakespearean romantic comedy, this version featured new characters like Mephistopheles and delved deep into language and the unconscious psyche. Jostling with this wordplay was stage composer Hiroko Tanakawa’s percussion instrument rhythm and the grand vision of director Miyagi that combined to create a festive musical conjuring up an “Unknown Forest” in Nishi-Sugamo Arts Factory. Transported from the original SPAC venue to this more intimate one in Tokyo brought the audience closer to the on-stage experience, enhancing the energetic appeal of the play, especially with its live music. The run also included satellite events such as a backstage tour of the set and a forum for audience members to share their impressions, attracting theatre fans of all ages.

©Kazuyuki Matsumoto

©Kazuyuki Matsumoto

©Kazuyuki Matsumoto

❸ ゾンビオペラ『死の舞踏』

安野太郎（コンセプト・作曲）×渡邊未帆（ドラマトゥルク）×危口統之（美術）

Zombie Opera “Danse Macabre”

Taro Yasuno (concept, music) + Miho Watanabe (dramaturgy) + Noriyuki Kiguchi (stage design)

11/12（Thu）– 11/15（Sun）
にしすがも創造舎
全4ステージ／来場：800名
Nishi-Sugamo Arts Factory
Performances: 4 / Audience: 800

作曲家・安野太郎の提唱する「ゾンビ音楽」を軸に、音楽学者・渡邊未帆、演劇集団「悪魔のしるし」主宰・危口統之が加わり、中世ヨーロッパ以来、さまざまな芸術作品、文学のなかで人間に平等に訪れる死を描いてきた『死の舞踏』をモチーフに、コンピュータ制御された「指」によって自動演奏するゾンビ楽器がメインの舞台作品を創作した。安野は今までに制作したリコーダーやサックス、フルート、クラリネットのゾンビ楽器のほか、新たに人口声帯を使った歌うゾンビ楽器を生み出し、全7曲を作曲。劇中では、人間たちの奴隷のような労働によって巨大な装置に空気が溜まり、その空気が供給されることで24の楽器からなる過去最大数のゾンビ楽器が音を奏でた。本来の音階だけではない、独自の音楽を生み出す「ゾンビ音楽」は人間と機械の関係性に問いを投げかけ、両者が歩む未来を舞台上へと出現させた。

Music scholar Miho Watanabe and Noriyuki Kiguchi of the theatre group Akumanoshirushi collaborated with composer Taro Yasuno and his unique “zombie music” project to create this stage performance featuring automated “zombie” instruments played by computer-controlled “fingers”. The central motif was the danse macabre, the dance of death that has been a common portrayal of the equality of death across a wide range of art and literature since the European Middle Ages. In addition to his previously developed zombie instruments (recorders, saxophones, flutes and clarinets), Yasuno also created a new instrument that sings using human vocal chords especially for this work, along with seven musical pieces. During the performance, human slave laborers pumped air into a giant device, which then played the 24-strong ensemble of zombie instruments. Yasuno’s zombie music produced its own original form of music that inquired into the relationship between humanity and machine, and presented a vision of their shared future.

特別協力：タカハ機工株式会社（ソレノイド）　Special co-operation from TAKAHA KIKO CO., LTD. (solenoid)

©Kazuyuki Matsumoto

©Kazuyuki Matsumoto

©Kazuyuki Matsumoto

❹ 地点×空間現代『ミステリヤ・ブッフ』

作：ヴラジーミル・マヤコフスキー　　演出：三浦 基　　音楽：空間現代

Chiten + kukangendai “Mystery-Bouffe”

Text: Vladimir Mayakovsky Direction: Motoi Miura Music: kukangendai

11/20（Fri）– 11/28（Sat）
にしすがも創造舎
全8ステージ／来場：1,664名
Nishi-Sugamo Arts Factory
Performances: 8 / Audience: 1,664

京都を拠点とする劇団・地点と、スリーピースバンド・空間現代の2度目となるコラボレーション。これまで数々のロシア戯曲に取り組んできた演出家・三浦基が、20世紀初頭のロシア・アヴァンギャルドを代表する詩人、マヤコフスキーの戯曲に挑んだ。ロシア革命を祝して書かれた本作は、聖書を戯画化した荒唐無稽な「笑劇」。世界が大洪水で沈没した後、聖者ではなく労働者が方舟に乗り、天国や地獄を巡る様子が描かれる。台詞の順序こそ入れ替えられているものの、書き換えはなく、マヤコフスキーがつむいだ革命の言葉は、三浦の手によって、現代の私たちにも確かな批評性を持って響いた。俳優たちの身体の躍動、音楽との拮抗、発せられる言葉、音の熱量——サーカス小屋を模した円形舞台（美術：杉山至）で繰り広げられる革命劇は、滑稽なせりふ回しで笑いも交えつつ、終始観客を圧倒し続けた。

Kyoto-based theatre company Chiten teamed up for the second time with three-piece band kukangendai. Director Motoi Miura is known for his work with Russian drama and here he tackles a classic of the early twentieth-century avant-garde by the poet and playwright Vladimir Mayakovsky. Written to celebrate the Russian Revolution, it is a comical and absurd biblical caricature, depicting a world submerged by a great deluge. However, instead of saints it is workers who ride on board a great ark, traveling between heaven and hell. Though the order of the lines was changed, the dialogue itself remained untouched, so that through Miura’s direction the language of revolution woven by Mayakovsky a century ago could resonate critically with contemporary audiences in Tokyo. From the throb of the actors’ bodies to the antagonism with the music, the emitted words, and the heat of sound, the at times ridiculous drama of revolution that unfolded on the circus tent-style round stage designed by Itaru Sugiyama overwhelmed and amused audiences from start to finish.

photo: Takafumi Yamanishi

photo: Takafumi Yamanishi

photo: Takafumi Yamanishi

❺『ブルーシート』

作・演出：飴屋法水

“Blue Tarp”

Text, Direction: Norimizu Ameya

11/14 (Sat), 11/15 (Sun), 12/4 (Fri) – 12/6 (Sun)
豊島区 旧第十中学校 グラウンド
全8ステージ／来場：2,949名
Former Toshima City 10th Junior High School (sports field)
Performances: 8 / Audience: 2,949

2013年に、飴屋法水と福島県立いわき総合高校の生徒10人が授業の一環として同校のグラウンドで上演し、2日間の公演にもかかわらず岸田國士戯曲賞の受賞をはじめ大きな反響を呼んだ『ブルーシート』。その待望の再演が、いわき総合高校と、F/Tで行われた。2年ぶりとなる今回の上演には、初演を経験した9人の元高校生と、在校生1人が出演。彼らのたわいもないやりとりや率直な言葉が、今はいない「11人目」の存在と共に、人間の生と死、生きることの意味を問いかけ、東日本大震災と原発事故後の「現在」を描き出した。東京公演の会場となったのは、豊島区内の元中学校のグラウンド。校庭の樹木、道行く人や車、隣接する高校の校舎など観客の目に映る風景も作品に取り込まれた。出演者、そして、いわきと東京、それぞれの人、場所の過去と現在を含んだ2015年の『ブルーシート』は、厳しい寒さの中、訪れた多くの人々の胸に深く刻まれる公演となった。

“Blue Tarp” was created by Norimizu Ameya with 10 students from Fukushima Prefectural Iwaki Sogo Senior High School as part of their drama curriculum, and was performed in the sports field of the school in 2013. Despite being staged for a mere two days, it caused a big stir and won Japan’s top theatre prize, the Kishida Kunio Drama Award. Two years later, it was revived again at Iwaki Sogo Senior High School and at F/T in Tokyo. The cast featured 9 former students from the original performance and another actor who remains at the school. Their idle chatter and candid words, along with the present yet absent eleventh student, posed questions about life and death, and painted a portrait of the current situation in the aftermath of the Great East Japan Earthquake and Fukushima nuclear crisis. The Tokyo performances were staged outdoors in the sports field of a former school in Toshima City. The backdrop of the trees in the schoolyard, passing pedestrians and vehicles, and adjacent school building were all reflected in the audience’s eyes as they watched and became part of the play. This 2015 “Blue Tarp” incorporated the performers, Iwaki and Tokyo, linking the respective pasts and presents of people and place, and leaving a profound impact on the audiences who came to see it in the cold early winter.

©YosukeTakeda

©YosukeTakeda

©YosukeTakeda

6 『God Bless Baseball』

作・演出　岡田利規

“God Bless Baseball”

Text, Direction: Toshiki Okada

11/19 (Thu) – 11/29 (Sun)

あうるすぽっと
全11ステージ／来場：2,431名

Owlspot Theater
Performances: 11 / Audience: 2,431

韓国・光州のAsian Arts Theatreオープニングプログラムとして本作を委託され、自身初の日韓共同製作に挑んだ岡田利規。キャストに日本人ダンサーや韓国人俳優を起用、美術には現代美術家の高嶺格を迎えるなど、今までの彼の作品とは異なる新たなメンバーで創作された。題材となったのは日韓でメジャーなスポーツ「野球」。ルールを知らない2人の女と野球嫌いの男、イチローを真似る謎の人物が両国の野球史や野球とは何か、野球を通して見た親子関係について、ユーモアも交えて語り合う。日本人の役を韓国人、韓国人の役を日本人が演じることで互いを身近に感じさせながら、物語は次第に両国の歴史と文化に内在するアメリカの存在を浮き彫りにしていく。天井高くに掲げられ、大きな存在感を放ち続ける高嶺制作のオブジェは、単なる2国間関係とは異なる、国同士の関係性を改めて想起させた。

Commissioned for the opening season of the Asian Arts Theatre in Gwangju, South Korea, this was Toshiki Okada’s first co-production with Korean partners. Working with several new collaborators, the cast of the play included both Japanese dancers and Korean actors, with stage design by artist Tadasu Takamine. The subject matter of the play was baseball, the American sport that is popular in both Japan and Korea. Exploring the significance of baseball and its history in the two nations, and the parent-child relationship that can be seen through the sport, the humorous play was composed of exchanges between two women ignorant of the game’s rules, a man who hates the sport, and a mysterious figure that does impressions of professional player Ichiro Suzuki. With Korean actors playing Japanese roles and vice versa, the intimacy between the cast was conveyed as the underlying presence of the United States in the histories and cultures of both countries was also brought into sharp relief. Takamine’s set featured a high ceiling and a large object suspended above the actors, providing fresh reminders of how Korea and Japan have a relationship that goes beyond that of merely two neighboring nations.

製作：プリコグ、チェルフィッチュ　Produced by precog, chelfitsch
国際共同製作 Co-produced by Asia Culture Center – Asian Arts Theatre; Festival/Tokyo; Taipei Arts Festival

©Kikuko Usuyama

©Kikuko Usuyama

©Kikuko Usuyama

7 富士見市民文化会館 キラリふじみ『颱風奇譚 태풍기담』

ソン・ギウン（作）×多田淳之介（演出）

Cultural Centre of Fujimi City, KIRARI FUJIMI “A Typhoon’s Tale”

Kiwoong Sung (text) + Junnosuke Tada (direction)

11/26 (Thu) – 11/29 (Sun)

東京芸術劇場 シアターイースト
全5ステージ／来場：833名

Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)
Performances: 5 / Audience: 833

演出家・多田淳之介と、日本との演劇交流にも積極的に関わる劇作家のソン・ギウン。2013年に韓国で最も権威ある演劇賞、東亜演劇賞を受賞した『가모메 カルメギ』のコンビによる新作。富士見市民文化会館キラリふじみ、第12言語演劇スタジオ、南山芸術センター、安山アートセンターの日韓共同製作で、2015年10月に韓国・安山で初日の幕を開け、南山、東京、富士見の計4都市を回った。両国のスタッフ・俳優はおよそ半数ずつ。日本語と韓国語のバイリンガルで上演された。

シェイクスピアの晩年の傑作『テンペスト』を下敷きにした本作。舞台を1920年代の東アジアに置き換え、国を追われた朝鮮の老王族、彼を陥れた異母弟、日本の政治家や軍人たちの悲喜劇を描いた。舞台美術を担当した島次郎は台風と島をイメージした幻想的な舞台空間を創り上げた。原作とは異なった結末を提示し、歴史を通して、現在を見つめる作品となった。

Japanese director Junnosuke Tada teamed up again with South Korean playwright Kiwoong Sung, who has a long connection with theatre in Japan. Following their acclaimed collaboration in 2013 with “Karumegi”, which won Korea’s top theatre prize, this new play was a co-production between Cultural Centre of Fujimi City, KIRARI FUJIMI in Japan and 12th Tongue Theatre Studio, Namsan Arts Center, and Ansan Arts Center in Korea. Premiered in Ansan in October 2015, the play then toured to three other cities: Namsan, Tokyo and Fujimi. Both cast and crew comprised half Korean and half Japanese members, while the play was also performed bilingually. Based on Shakespeare’s late masterpiece “The Tempest”, the setting was changed to East Asia in the 1920s in this tragicomedy about an old, exiled Korean king and the stepbrother who caused his downfall, and the Japanese politicians and soldiers who are also involved. The stage design by Jiro Shima brilliantly created a magical sense of the eponymous typhoon and the island on which the story takes place. With a deliberately different ending to the original source, the play deftly explored the present through the events of history.

共催：独立行政法人国際交流基金、公益財団法人キラリ財団
Co-presented by the Japan Foundation and Kirari Foundation

©Nobuyuki Kagamida

©Nobuyuki Kagamida

©Nobuyuki Kagamida

8 『TODO EL CIELO SOBRE LA TIERRA (EL SÍNDROME DE WENDY)』『地上に広がる大空（ウェンディ・シンドローム）』

作・演出・美術・衣裳：アンジェリカ・リデル（アトラ・ビリス・テアトロ）

“All the Sky Above the Earth (Wendy’s Syndrome)”

Text, Direction, Stage Design, Costumes: Angélica Liddell (Atra Bilis Teatro)

11/21 (Sat) – 11/23 (Mon)

東京芸術劇場 プレイハウス
全3ステージ／来場：1,219名

Tokyo Metropolitan Theatre (Playhouse)
Performances: 3 / Audience: 1,219

アヴィニョン演劇祭をはじめ、ヨーロッパ各地の主要フェスティバル、劇場で上演され、注目を集めるアンジェリカ・リデルの代表作。アジア初演となる本作は、『ピーターパン』のヒロイン、ウェンディが主人公。ネバーランド、多くの若者が殺された銃乱射事件（2011年）の現場ウトヤ島、老いた男女が路上でワルツを踊る上海と、3つの場所を舞台に、彼女を通して見た、若さの喪失、老いにより見捨てられる恐怖、母性神話に対する憎悪といったテーマが探求された。なかでも作品の後半、リデル自身が演じるウェンディによる1時間以上におよぶ怒涛のモノローグは、多くの観客に衝撃を与え、賛否両論を巻き起こした。また、韓国の映画界で活躍するチョ・ヨン・ムクが手がけたワルツをウィーンの現代音楽グループ「PHACE」が演奏したほか、ノルウェーの賛美歌、中国琵琶など、ジャンル、国を超えた音楽が、詩的かつ過激な作品に彩りを添えた。

Staged at major festivals and theatres around Europe, including Festival d’Avignon, this is one of Angélica Liddell’s most important works. These Tokyo performances marked its premiere in Asia. The main character is Wendy, the heroine of “Peter Pan”, who travels to three settings—Neverland, the Norwegian island of Utøya where many young people were killed in 2011, and Shanghai, where an elderly man and woman dance a waltz—in an exploration of universal themes: the loss of youth, the fear of being abandoned, and a hatred of maternal myths. The second half of the play featured a raging, hour-long monologue by Wendy performed by Liddell herself that shocked and divided audiences. The transnational and crossover music, including Vienna group PHACE playing waltzes composed by Korean film favorite Jo Yeong-wook, Norwegian hymns, and Chinese pipa music, further enhanced the poetic and radical play.

特別協力：駐日スペイン大使館　In co-operation with the Embassy of Spain in Japan

©JUN ISHIKAWA

©JUN ISHIKAWA

©JUN ISHIKAWA

9 パリ市立劇場『犀』

作：ウジェーヌ・イヨネスコ　　演出：エマニュエル・ドゥマルシー=モタ

Théâtre de la Ville-Paris “Rhinocéros”

Text: Eugène Ionesco　Direction: Emmanuel Demarcy-Mota

11/21 (Sat) – 11/23 (Mon)

彩の国さいたま芸術劇場大ホール
全3ステージ／来場：1,387名

Saitama Arts Theater (Main Theater)
Performances: 3 / Audience: 1,387

20世紀のフランスを代表する劇作家イヨネスコの『犀』が、パリ市立劇場の演出家エマニュエル・ドゥマルシー=モタの演出で新たに上演された。友人や隣人たちが次々と犀に変身し、やがて街全体が犀に埋め尽くされるという戯曲は、その奇妙な設定から不条理演劇の代表作と呼ばれている。ドゥマルシー=モタはダイナミックな舞台装置と身体性に富んだ演出で、不条理演劇につきまとう難解なイメージを打ち壊してみせた。イヨネスコが祖国・ルーマニアで見たファシズムの台頭をモチーフとした本作。そこに描かれた滑稽さと恐怖は決して、過去の産物ではない。現代社会の偏った政治状況と世相への警鐘を鳴らした本公演は、イヨネスコの精神を受け継ぐものだった。また、公演直前に起きたパリ同時多発テロも、演出家が焦点をあてた現代社会の問題をより強く意識させる要因となった。

This classic of Theatre of the Absurd by Eugène Ionesco was staged in Saitama in a bold reimagining by Théâtre de la Ville-Paris director Emmanuel Demarcy-Mota. The unique fable depicts a French village whose inhabitants all gradually turn into rhinos. Demarcy-Mota’s dynamic set and physical directing broke down the enigma and monotony often associated with Absurdist drama. While inspired by the onset of fascism in Ionesco’s home country of Romania, the play’s humor and horror are very much not merely relegated to historical circumstances. In the same spirit as Ionesco originally wrote his play, the performances at F/T15 seemed to sound a warning about the unbalanced social and political situation we face today. The terror attacks in Paris in November further deepened audiences’ awareness of the contemporary social problems that Emmanuel Demarcy-Mota was showing.

助成：アンスティチュ・フランセ パリ本部、平成27年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業　主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団、フェスティバル/トーキョー実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン　協力：アーツカウンシル東京・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
Supported by Institut français, the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the Fiscal 2015　Presented by Saitama Arts Theater, Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan（NPO-ANJ）　In co-operation with Arts Council Tokyo & Tokyo Metropolitan Theatre（Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture）

©Arnold Groeschel

©Arnold Groeschel

©Arnold Groeschel

⑩ ギンタースドルファー/クラーセン『LOGOBI 06』

Gintersdorfer/Klaßen “Logobi 06”

11/26 (Thu) – 11/29 (Sun)
アサヒ・アートスクエア
全5ステージ／来場：349名

Asahi Art Square
Performances: 5 / Audience: 349

ドイツ拠点のクリエイティブ集団、ギンタースドルファー/クラーセンによるLOGOBIシリーズの最新作。演出家のモニカ・ギンタースドルファー、ヴィジュアル・アーティストのクヌート・クラーセン、コートジボワール出身のダンサーであるフランク・エドモンド・ヤオ、ゲストダンサーのイスマエラ 石井丈雄が、歌舞伎やJポップのダンス、舞踏などを鑑賞したり、日本舞踊のレッスンを受けるなど、日本独自の動きを事前に東京でリサーチ。対話を重ねながら舞台を構成していった。

本番では、おおよその要素は決められているものの、ダンスミュージックやJポップなどの自由な選曲のもと、石井の同時通訳も交えつつ、ダンサー2人による即興のロゴビやコンテンポラリーダンス、日本舞踊のモチーフなどが披露された。毎回異なる舞台には、それぞれのダンスへのアプローチはもちろん、身体的文化的なバックグラウンドの違い、さらには通訳による言葉の揺れが自然と浮かび上がり、観客は文化的アイデンティティの輪郭、その形成の過程を目の当たりにすることができた。

This was the latest entry in the “Logobi” series by the Germany-based multicultural unit Gintersdorfer/Klaßen. The collaboration between director Monika Gintersdorfer and visual artist Knut Klaßen with Côte d’Ivoire-born dancer Franck Edmond Yao and guest dancer Ismaera Takeo Ishii was developed out of local research in Tokyo, including watching Kabuki, J-pop dance and Butoh, as well as taking a class in Nihon Buyo traditional dance. The work was then devised through an exchange of dialogue between the creators. The final performances featured generally fixed elements but the choice of dance music and J-pop tracks would vary, with Ishii providing simultaneous interpretation in Japanese as the two dancers improvised based on the motifs of logobi street dance, contemporary dance, and Nihon Buyo. Each performance was different, with their respective approaches to dance, diverging physical and cultural backgrounds, and the jolts of language created by the interpretation coming naturally into relief. The audience could witness the outline of cultural identity and the process of how this is shaped.

特別協力：東京ドイツ文化センター　In co-operation with Goethe-Institut Tokyo

©Kazuyuki Matsumoto

©Kazuyuki Matsumoto

©Kazuyuki Matsumoto

⑪ ゲーテ・インスティトゥート韓国 × NOLGONG『Being Faust – Enter Mephisto』

構成：ピーター・リー
Goethe-Institut Korea + NOLGONG “Being Faust – Enter Mephisto”
Concept: Peter Lee

11/19 (Thu) – 11/22 (Sun)
東京芸術劇場 シアターイースト
全6ステージ／来場：371名

Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)
Performances: 6 / Audience: 371

ドイツの公的文化機関ゲーテ・インスティトゥート韓国と、ゲーム開発会社NOLGONGが、ドイツの文化と東アジアのゲームカルチャーをつなぐインターフェースとして共同で開発した本作。スマートフォン／タブレットを使った参加型作品で、ゲーテが「ファウスト」で描いた欲望と代償をテーマに制作されている。2014年にソウルで発表されて以来、世界各地で実施されてきたが、今回日本には初上陸となった。

ファウストとなった観客が会場を回遊、友人を売ってお金に替え、自身が選んだ価値観に合致する引用句を購入し、満足ポイントをためていくというのが、本作の一連の流れだ。観客は「ファウスト」からの引用句を味わうだけでなく、自らその引用句（＝価値観）を選択することで、自身の欲望や葛藤に直面していくこととなった。悪魔・メフィストにあたる進行役には俳優・古屋隆太（サンプル・青年団）を起用。東京公演ならではの演出によって、「ファウスト」を日本の観客にとってより身近なものにした。

Goethe-Institut Korea partnered with game development company NOLGONG for this initiative linking German culture with East Asian gaming. Participants used a smartphone or tablet to play a game themed around Goethe’s classic portrayal of worldly desire and rewards. First presented in Seoul in 2014, it has since been recreated around the globe and came to Japan for the first time as part of F/T15. The audience is cast as Faust and moves around the venue, selling their friends in exchange for money and purchasing quotations that correspond to certain values that they choose to build up points. Participants not only sampled the quotations from “Faust” but also confronted their own desires and the conflicts that arose from selecting these as values. The navigator role of Mephisto was taken by actor Ryuta Furuya (Sample, Seinendan), lending a highly specific Tokyo flavor to this version that made it more accessible for local audiences.

共催：東京ドイツ文化センター　Co-presented by Goethe-Institut Tokyo

©NOLGONG

©NOLGONG

©NOLGONG

⑫ アジアシリーズ vol.2 ミャンマー特集『ラウンドアバウト・イン・ヤンゴン』

Aプログラム：ティーモーナイン（パフォーマンス、インスタレーション、映像作品）
ニャンリンテッ（演劇作品）
Bプログラム：ターソー（音楽ライブ）

Asia Series Vol.2: Myanmar “Roundabout in Yangon”

Program A: The Maw Naing (performance, installations, video works),
Nyan Lin Htet (theatre performance)
Program B: Thxa Soe (live music)

11/13 (Fri) – 11/15 (Sun)
アサヒ・アートスクエア
Aプログラム　全3ステージ／来場：211名
Bプログラム　全2ステージ／来場：132名
関連企画　182名

Asahi Art Square
Program A　Performances: 3 / Audience: 211
Program B　Performances: 2 / Audience: 132
Satellite Events: 182

F/T14から開始したアジアシリーズではさまざまな言語や文化が混在するアジア地域から1カ国を選定し、その国にフォーカスした特集を行っている。F/T15では第2弾としてミャンマーを特集。フェスティバルのスタッフが2014年12月にF/T14で招聘したモ・サ主宰の国際パフォーマンスイベント『ビヨンド・プレッシャー』を現地で視察し、そこで築いたネットワークを元に、2015年3月に再訪し、伝統芸能や文化教育機関への調査、作品鑑賞やアーティストとの対話を通じ特集のプログラミングを行った。

『ラウンドアバウト・イン・ヤンゴン』では3アーティストが作品を発表。さまざまな表現媒体を扱うティーモーナインによるインスタレーションの展示、パフォーマンスの上演、映像作品の上映、そしてミャンマー現代演劇の先駆者であるニャンリンテッによる演劇『キングダム・ヴォイド』の上演がAプログラムにて行われた。Bプログラムでは、ミャンマーの伝統音楽とエレクトロミュージックをミックスし、伝統舞踊のバックダンサーを従えるターソーが音楽ライブを行った。三者三様の作品をひとつの空間にまとめあげたのは建築家・美術家の佐野文彦。天井に伸び、交差する赤と黄の帯でミャンマーの今を表現した。

さらにミャンマーのアートシーンへの理解を掘り下げるために、基礎知識トークセッションや映画特集を行った。またポレポレ東中野との共催による映画上映＋トークショーも開催した。

Launched at F/T14, the Asia Series showcases a country in the Asian region where so many languages and cultures intermix. The second Asia Series at F/T15 focused on Myanmar. Festival staff visited Myanmar in December 2014 to observe the international performance event Beyond Pressure, led by F/T14 participant Moe Satt. From there they built up a network and visited again in March 2015. The showcase was programmed based on surveys of traditional performing arts and culture and education agencies, as well as directly experiencing local artworks and engaging in dialogue with artists.

“Roundabout in Yangon” featured work by three artists. Program A included installations by multimedia artist The Maw Naing as well as performances, video art work screenings, and a performance of “Kingdom Void” by leading Myanmar theatre artist Nyan Lin Htet. Program B comprised live music by Thxa Soe, mixing traditional music with electro, and featuring traditional dance backup dancers. The three artists’ very different work was all hosted in a space designed by architect and artist Fumihiko Sano, expressing contemporary Myanmar through its high ceiling and intersecting red and yellow colors.

In addition to these two programs, the showcase featured several events to introduce Tokyo audiences to the art scene in Myanmar, including talks and screenings. There was also a special film screening and talk at Theater Pole-Pole Higashi-Nakano.

関連企画　Satellite Events

ミャンマー基礎知識トークセッション※	登壇者：田村克己（総合研究大学院大学理事、国立民族学博物館名誉教授）× 五十嵐理奈（福岡アジア美術館 学芸員）
ポスト・パフォーマンストーク　『ミャンマーの映画シーン』	登壇者：ティーモーナイン×清 恵子（キュレーター、メディア・アクティビスト、著述者）
ポスト・パフォーマンストーク　『ミャンマーの演劇シーン』	登壇者：ニャンリンテッ×久野敦子（公益財団法人セゾン文化財団 プログラム・ディレクター）
映画『The Monk』上映・監督によるトーク　共催：ポレポレ東中野	登壇者：ティーモーナイン（『The Monk』監督）
ミャンマー映画特集（1）映画『The Monk』上映会・トーク	登壇者：ティーモーナイン（『The Monk』監督）、アウンミン（『The Monk』脚本）
ミャンマー映画特集（2）ミャンマー映画3作品上映	①『The Monk』　監督：ティーモーナイン　脚本：アウンミン ②『Beauty of Tradition -ミャンマー民族音楽への旅-』　監督・音楽・プロデューサー：川端 潤 ③『ナルギス – 時間が止まった時』　監督：ティーモーナイン、ペマウンセイン

Talks

Myanmar: The Basics	Guests: Katsumi Tamura (Executive Director, Graduate University for Advanced Studies; Professor Emeritus, National Museum of Ethnology), Rina Igarashi (curator, Fukuoka Asian Art Museum)
Post-Performance Talk: Myanmar Film Scene	Guests: The Maw Naing, Keiko Sei (curator, media activist, writer)
Post-Performance Talk: Myanmar Theatre Scene	Guests: Nyan Lin Htet, Atsuko Hisano (Program Director, the Saison Foundation)
“The Monk” Screening & Talk	Guest: The Maw Naing Co-presented by Theater Pole-Pole Higashi-Nakano
Myanmar Film Screenings: “The Monk” (screening & talk)	Guests: The Maw Naing (director), Aung Min (screenwriter)
Myanmar Film Screenings: 3 Recent Films from Myanmar	(1) “The Monk” Director: The Maw Naing Screenplay: Aung Min (2) “Beauty of Tradition — Under the Sky of Yangon” Directed, Music and Produced by Jun Kawabata (3) “Nargis — When Time Stopped Breathing” Directors: The Maw Naing, Pe Maung Same

共催：独立行政法人国際交流基金アジアセンター　Co-produced by the Japan Foundation Asia Center
※協賛：ホテルグランドシティ レストランセゾン　Supported by Hotel Grand City Restaurant Saison

©Yohta Kataoka

©Yohta Kataoka

©Yohta Kataoka

5-2 主催企画　Related Events

F/Tトーク　F/T Talks

タデウシュ・カントル生誕100年記念「ポーランド演劇の現在形」
Tadeusz Kantor Centenary: Polish Theatre Today

11/24（Tue）– 11/29（Sun）
東京芸術劇場 アトリエイースト 他
来場：143名　　ワークショップ参加者：52名

11/24 (Tue) – 11/29 (Sun)
Tokyo Metropolitan Theatre (Atelier East)
Audience: 143
Workshop Participants: 52

現代ポーランド演劇の見取り図を描くことを目的に企画された本シリーズは、ポーランドから20代～40代の若手演出家3名を招聘し、6日間にわたって行われ、日本では手に入る情報も少なかったポーランド演劇の現在について、観客と共に理解を深める貴重な機会になった。初日は企画者でもあるドラマトゥルクの横堀応彦がポーランドの最新の演劇を紹介する国際ミーティング「Polska New Theatre」について報告し、ポーランド広報文化センターの久山宏一が日本におけるポーランド演劇の受容に関する講演を行った。2日目は、演出家のウカシュ・トゥファルコフスキとマグダ・シュペフトがそれぞれの活動について、演劇と政治問題との関係に言及しながら紹介した。3日目と5日目に開催されたグロトフスキの記録映像上映では歴史的に貴重な映像資料を紹介、ヤロスワフ・フレトによる明解な解説を手がかりに「持たざる演劇」の思想について理解を深めた。最終日のディスカッションでは演劇を通して見える現代ポーランドの社会変化について観客も交えて多角的に議論した。また、2日間にわたって行なわれたワークショップには異なる背景をもった約20名の若手俳優たちが参加。レクチャーやゲーム的な要素を織り交ぜたプログラムを通じ、身体についての新たな視点が与えられた。

This six-day series of events aimed to provide an overview of contemporary Polish theatre, featuring three young directors from Poland aged in their twenties to forties as guest speakers. The first day included a report from dramaturge and program organizer Masahiko Yokobori about the recent international conference Polska New Theatre. He was joined by Koichi Kuyama of Instytut Polski w Tokio to talk about the reception of Polish theatre in Japan. The second day of the program welcomed the directors Łukasz Twarkowski and Magda Szpecht, who introduced their respective activities as well as discussed the relationship between theatre and politics. On the third and fifth days of the program there were valuable screenings of two examples of the pioneering work of Jerzy Grotowski, followed by commentary by the Grotowski Institute's Jarosław Fret on Grotowski's concept of a "Poor Theatre". The final day was a discussion-style talk looking at social changes in contemporary Poland through the context of theatre and also involved input from the audience that made for a multi-faceted debate. Alongside these events, a two-day workshop was also organized with around 20 young actors from different backgrounds. Through participating in a program of lectures and game-style activities, the actors could acquire fresh perspectives on their bodies. Overall, this program proved a highly valuable opportunity for audiences to deepen their understanding of theatre in Poland today, about which little remains known in Japan.

トーク・ディスカッション・映像上映

Talks, Discussions and Film Screenings

11/24 (Tue)　トーク(1)「国際ミーティング＜Polska New Theatre＞レポート」
登壇者：マグダ・シュペフト（演出家）、久山宏一（ポーランド広報文化センター）、
横堀応彦（ドラマトゥルク、F/T15ディレクターズコミッティ）

11/24 (Tue) Talk 1: Report on Polska New Theatre International Meeting
Panelists: Magda Szpecht (director), Koichi Kuyama (Instytut Polski w Tokio),
Masahiko Yokobori (dramaturge, F/T Directors Committee)

11/25 (Wed)　トーク(2)「ポーランドにおける演劇活動の現在」
登壇者：ウカシュ・トゥファルコフスキ（ヴロツワフ・ポーランド劇場専属演出家）、
マグダ・シュペフト
司会：横堀応彦

11/25 (Wed) Talk 2: Theatre in Poland Today
Panelists: Łukasz Twarkowski (Polski Theatre in Wrocław), Magda Szpecht
Moderator: Masahiko Yokobori

11/26 (Thu)　「アクロポリス」映像上映＋トーク

11/26 (Thu) Screening & Talk: "Akropolis"

11/28 (Sat)　「不屈の王子」映像上映＋トーク

11/28 (Sat) Screening & Talk: "The Constant Prince"

11/29 (Sun)　ディスカッション「ポーランド演劇の伝統と革新」
登壇者：ヤロスワフ・フレト（演出家、Teatr ZAR主宰、グロトフスキ・インスティトゥート代表）、ウカシュ・トゥファルコフスキ、マグダ・シュペフト
モデレーター：岩城京子（演劇ジャーナリスト）

11/29 (Sun) Discussion: Polish Theatre – Traditions and Innovations
Panelists: Jarosław Fret (Teatr ZAR, Director of Grotowski Institute),
Łukasz Twarkowski, Magda Szpecht
Moderator: Kyoto Iwaki (theatre journalist)

Teatr ZARによるワークショップ「俳優の身体」

Teatr ZAR Workshop: Actor's Body – An Evoked Drama

11/26 (Thu) – 27 (Fri)
会場：東京芸術劇場 リハーサルルーム
講師：ヤロスワフ・フレト、シモーナ・サラ（Teatr ZAR）

11/26 (Thu) – 11/27 (Fri)
Venue: Tokyo Metropolitan Theatre (Rehearsal Room)
Instructors: Jarosław Fret, Simona Sala (Teatr ZAR)

共催：ポーランド広報文化センター　Co-presented by Instytut Polski w Tokio
後援：駐日ポーランド共和国大使館　Under the auspices of the Embassy of the Republic of Poland in Japan

多民族国家マレーシアにおける舞台芸術　Performing Arts in Multi-Ethnic Malaysia

登壇者：
11/6 (Fri)：チー・セク・ティム（演出家、俳優、芸術教育者、Five Arts Centerメンバー）
11/7 (Sat)：ウォン・オイ・ミン（芸術学博士、演出家、俳優、マレーシア国立芸術文化遺産大学 演劇学部長、ASLI演劇連盟前代表）、
ジョセフ・ゴンザレス（ASWARA Dance Company 芸術監督、マレーシア国立芸術文化遺産大学ダンス学部 前学部長）
ゲスト：山田うん（ダンサー、振付家）
Panelists:
11/6 (Fri) Chee Sek Thim (director, actor, arts educator, member of Five Arts Centre)
11/7 (Sat) Wong Oi Min (drama/theatre educator, actor, director, Dean of the Faculty of Theatre at ASWARA [National Academy of Arts, Culture & Heritage], former President of Alliance of Malaysian Chinese-language Theatre [ASLI]),
Joseph Gonzales (artistic director and founder of ASWARA Dance Company, former Dean of the Faculty of Dance, ASWARA [National Academy of Arts, Culture & Heritage]),
Guest: Un Yamada (director of Co. Yamada Un, choreographer, dancer)

11/6 (Fri) – 11/7 (Sat)
ホテルグランドシティ レストランセゾン
来場：58名

Hotel Grand City (Restaurant Saison)
Audience: 58

近年、東南アジアの舞台芸術シーンにおいて急速に存在感を高める多民族国家マレーシア。今後のアジアシリーズでの特集に向け、マレーシアから3名のアーティストを迎え、同国における、パフォーミング・アーツの現状と可能性について聞く2日連続のトークイベントを開催した。

マレーシアのアートシーンを常にリードしてきた「ファイブ・アーツ・センター」のメンバーであるチー・セク・ティムは、同グループの多岐にわたる活動を国の歴史や社会的な背景と共に紹介。ジョセフ・ゴンザレスは、マレーシアにおける多様なダンスの歴史とコンテンポラリーダンスの現状、また自身が教鞭を取る大学に講師として迎えた山田うんを交え、若手ダンサーの育成の現状と課題について語った。ウォン・オイ・ミンは、日本ではこれまでなかなか知られることがなかった中国語、マレー語演劇の代表的な作品、作家をあげつつ紹介した。マレーシアの多様で複雑な状況について理解を深める2日間となった。

Malaysia's theatre scene has experienced rapid growth in recent years. The nation is also home to a wide range of ethnic groups, which affects the character of the local performing arts. In preparation for a future Asia Series showcase, three guests from Malaysia discussed the current performing arts scene and its future possibilities in talks over two consecutive days.

Chee Sek Thim, a member of the pioneering Five Arts Centre, introduced Malaysia's history and social background, along with the activities of his organization. Joseph Gonzales spoke about Malaysia's diverse dance history and the state of contemporary dance, and was joined by Un Yamada, who was an instructor at his university, to discuss the current situation for and issues facing young dancers. Finally, Wong Oi Min introduced major examples of theatre works and artists in Malaysian and Chinese who are little known in Japan.

協賛：ホテルグランドシティ レストランセゾン　Supported by Hotel Grand City Restaurant Saison
協力：国際交流基金クアラルンプール日本文化センター　In co-operation with the Japan Foundation, Kuala Lumpur

中国現代演劇の現在形　Chinese Theatre Today

登壇者：チェン・ラン（演劇ジャーナリスト）、岡田利規（演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰）
モデレーター：小山ひとみ（フェスティバル/トーキョー コーディネーター、中国語通訳・翻訳）

Panelists: Ran Chen (theatre journalist), Toshiki Okada (playwright, novelist, head of chelfitsch)
Moderator: Hitomi Oyama (Festival/Tokyo co-ordinator, Chinese interpreter and translator)

11/23 (Mon)
東京芸術劇場 アトリエイースト
来場：39名

Tokyo Metropolitan Theatre (Atelier East)
Audience: 39

劇場、フェスティバル、つくり手も増え、盛り上がりをみせる中国演劇界。商業的なものから実験的なものまで、多種多様な作品が発表されている。本企画では北京をベースに活動するジャーナリストのチェン・ランと、2015年に中国を訪れた演出家・岡田利規を登壇者に迎え、今、中国の観客にどのような演出家／作品が受け入れられているのかを聞いた。

「伝統芸能がもつ美学を現代演劇に取り込んだ作品」、「現代社会を反映した物語性のある作品」、「多元化したモダニズム演劇」。チェンは、中国現代演劇の特徴をこれら3つに分類し、注目を集める演出家と作品について紹介した。岡田は、北京と上海を訪れた際に出会ったつくり手たちから得た刺激や北京で開催したイベントについて語った。質疑応答では、日中の観客の違いや、演出家やスタッフの働き方についても意見が交わされ、両国の演劇事情を多角的に知ることのできる貴重な場となった。

The Chinese theatre world is experiencing a notable surge in theatres, festivals and artists, producing a wide range of performing arts from the commercial to the experimental. This talk welcomed Beijing-based journalist Ran Chen and the Japanese director Toshiki Okada, who visited China in 2015, to discuss the types of directors and theatre works currently popular with Chinese audiences. Chen classified Chinese contemporary theatre into three categories (works incorporating the aesthetic of traditional performing arts into contemporary theatre, plays with narrative styles that reflect contemporary society, and diversified modernist theatre) and introduced directors and plays that have attracted attention. Okada discussed events in Beijing and the inspirations he received from the artists he met when he visited Beijing and Shanghai. Audience questions highlighted differences between Japanese and Chinese audiences as well as the way production staff and directions work, turning the event into a valuable session that offered multiple perspectives on the theatre circumstances in both countries.

展示　Exhibitions

2015年5月にオープンした豊島区役所新庁舎内の回廊状の廊下を利用した「庁舎まるごとミュージアム」にて、F/T15のメインビジュアルを活用した展示を開催。naomi@paris,tokyoの描くさまざまな要素が重なり合うイラストと、多くの国や地域から作品、アーティスト、観客が広場（劇場）に集まり、結びつくフェスティバルのあり方をリンクさせて紹介する広報展示物を作成、展示した。絵本を意識した構成は区役所を訪れた多くの人の目に留まり、F/T15の新たなビジュアルのイメージを印象づけることとなった。

また公演会場のひとつになったあうるすぽっと【豊島区立舞台芸術交流センター】と同じ建物内にある豊島区立中央図書館では、館内の特設コーナーにてプログラムに関連する書籍を配架し、貸出。作品紹介のパネルも作成し、来館者に対するPRを行なった。

F/T15 exhibited the festival's main visual design at Marugoto Museum, a gallery facility at Toshima City Office, which reopened in May 2015. The exhibits included F/T15's illustrated theme created by naomi@paris,tokyo, as well as a range of other materials featuring artists, performances, theatres, and festivals from around the world. Structured like a picture book, the exhibition was seen by a large number of people and left a striking impression.

Another exhibition was organized at Toshima Central Library, which is located in the same building as Owlspot Theater. The exhibition was a showcase of publications related to the festival that library users could borrow, as well as wall displays introducing the performances at F/T15.

11/1 (Sun) – 11/30 (Mon)
豊島区役所内庁舎まるごとミュージアム
Toshima City Office (Marugoto Museum)

9/26 (Sat) – 11/26 (Thu)
豊島区立中央図書館
Toshima Central Library

F/T Books　F/T Books

書籍を通じて観客が作品への関心を掘り下げることのできる恒例企画「F/T Books」を、池袋の2書店と連携し開催。ジュンク堂池袋本店では、参加アーティスト一人ひとりが「創作に影響を与えた本は？」などのF/Tからの問いかけに応えるかたちでセレクトした書籍が展示販売された。それぞれの作品の背景やクリエイションの核に迫った選書は、芸術についてだけでなく、社会、歴史、哲学など幅広い分野にわたるもので、知的好奇心を大いに刺激した。また、エスカレーター前という好立地に作られた特設コーナーは、F/Tやアーティストをより多くの人々にアピールするきっかけともなった。

さらに、東京芸術劇場1階のシアターアートショップでも演目に合わせた選書を展開。作品の持つ歴史的背景や社会的問題などに触れた書籍は、観劇の際の理解の一助となった。

F/T Books is the festival's regular initiative that offers ways for audiences to explore more about the programming through related reading materials. This year it was held at two bookstores in Ikebukuro.

At Junkudo Ikebukuro each of the participating artists selected books that had influenced them and these were then arranged as a special display. The books presented opportunities to learn about the backgrounds and ideas behind each work in the festival, and their wide scope, dealing not only with the arts but also social, political and philosophical issues, meant they offered broad intellectual stimulation. The display enjoyed a prominent position by the escalators, increasing the reach of the festival.

Theatre Art Shop, located on the ground floor of Tokyo Metropolitan Theatre, also curated a series of books related to the festival. Dealing with the historical contexts and social issues featured in the productions, the books enhanced the theatre-going experience for audiences.

10/31 (Sat) – 12/6 (Sun)
ジュンク堂書店 池袋本店　9F芸術書フロア
Junkudo Ikebukuro (9F Arts section)

11/17 (Tue) – 11/29 (Sun)
シアターアートショップ
Theatre Art Shop

5-3 関連イベント　Satellite Events

主催プログラムに関連するワークショップの開催や、外部団体との協力関係によるトークイベントなどを開催。

A series of events were organized alongside the festival's Main Program, including workshops and talks with other partner organizations.

1 アンジェリカ・リデルワークショップ
Angélica Liddell Workshop

7/24 (Fri) – 7/30(Thu)
会場：東京芸術劇場
参加者：俳優、ミュージシャンまたはダンサーとして活動している11名
発表会来場：17名

Tokyo Metropolitan Theatre
Participants: 11 actors, musicians and dancers
Audience: 17

アーティスト紹介も兼ね、6日間に及ぶワークッショップを開催。聖書の創世記を題材に、創造と破壊、地獄と慈悲が描かれた小作品を創作した。約50名の応募者の中から選ばれた11名の参加者は、リデルからの質問を通して個人の内面、体験と対峙し、身体に表出させるエチュードを連日繰り返した。まるで毒を吐き出すような動きの一つひとつを、リデルは暴力的で儀式的な作品へと昇華させ、最終日にはマスコミ、関係者向けに発表会を開いた。

Angélica Liddell led a six-day workshop in Tokyo, drawing on the Book of Genesis to create a small-scale performance about creation, destruction, hell and mercy. The 11 participants were selected from around 50 applicants. Over the days of the workshop Liddell made them confront their own identities and experiences, and then express this through their bodies. Liddell shaped their individual movements into a violent and ritualistic work, which was presented to invited members of the press and a small audience on the final day.

2 レクチャー「アンジェリカ・リデル　作品と創造のプロセス」
Lecture: "Angélica Liddell: Her Work and Creative Process"

講師：アンジェリカ・リデル
Lecturer: Angélica Liddell

7/27 (Mon)
会場：早稲田大学戸山キャンパス
来場：79名
主催：早稲田大学文学部演劇映像コース
協力：フェスティバル/トーキョー

Toyama Campus, Waseda University
Audience: 79
Presented by Studies in Theatre and Films, Waseda University
In co-operation with Festival/Tokyo

アンジェリカ・リデルを講師に迎え、彼女の代表作、4作品を映像で紹介すると共に、作品創造のプロセスについて話を聞いた。かつては、社会批判を込めた、政治性を帯びる作品が目立ったが、近年は心の深部を描くことに興味があるというリデル。世界中で前衛的な作品と評されることが多いが、決して新しいことを行っているつもりはなく、中世の古典演劇など古いものに影響されていることなど、創作の核心に触れた講義は、観劇に向けて彼女をより深く知ることのできる機会となった。

Angélica Liddell gave this lecture in Tokyo about her major work, introducing four plays through video excerpts and also discussing her creative process. While she was previously known for her socially critical and political work, her recent interests lie more in depicting the depths of our psychology. Though acclaimed as an experimental artist, she explained that her intention is not to make something new per se and in fact her influences include medieval theatre and other old works of art. Ahead of the performances of Liddell's in Tokyo in the autumn, the lecture was a valuable and insightful opportunity for audiences.

3 フェスティバル/トーキョー15　×　美術手帖　コラボレーション企画
石黒 浩×安野太郎×岩渕貞哉 トークイベント
ゾンビオペラ『死の舞踏』公演記念「人間と機械 ― 操り、操られるのはどちらか？」
Hiroshi Ishiguro + Taro Yasuno + Teiya Iwabuchi Talk

10/27 (Tue)
会場：かもめブックス
来場：50名
主催：フェスティバル/トーキョー、美術手帖

kamomebooks
Audience: 50
Presented by Festival/Tokyo, Bijutsu Techo

人間と機械の境界とその新しい関係性について語るトークイベントを、かもめブックスにて開催。仕草や外見が人間そっくりのアンドロイドやマツコロイドの制作など、ロボット工学で世界的注目を集める石黒浩教授と、リコーダーなどの吹奏楽器を主とする自動演奏楽器を軸に、ゾンビオペラの音楽制作、出演を担当した安野太郎が登壇した。二人がそれぞれに抱くロボット観と人間らしさを併せ持つ機械の存在を通して、人間とは何かを探る思考の扉が開かれた。

This talk examined the border between human and machine, and the new relationship that has emerged recently. The speakers included Hiroshi Ishiguro, who has become world-famous for his uncannily realistic androids, and Taro Yasuno, whose original type of automatic music using recorders and wind instruments formed a core part of Zombie Opera "Danse Macabre". Their dialogue opened new doors to our concepts of robot, machine, and human.

4 アテネ・フランセ特別講演　フランス前衛劇の魅力 ～イヨネスコ『犀』上演によせて～
Lecture: "Ionesco's 'Rhinocéros' and the French Avant-Garde"

11/14（Sat）
講演者：島崎貴則（アテネ・フランセ講師）
会場：アテネ・フランセ
来場：53名
主催：アテネ・フランセ

Lecturer: Takanori Shimazaki (Athénée Français)
Athenee Francais
Audience: 53
Presented by Athénée Français

アテネ・フランセの講師である島崎貴則によるフランス前衛劇の魅力を語る講演会。1960年に初演された『犀』。半世紀たった今、前衛劇の何が新しかったのか、その魅力はなんだったのかを17世紀古典派以来のフランス演劇史の中で捉えなおす講演は、観劇にむけてより深く作品や時代背景を伝える機会となった。

It is over half a century since the premiere of Ionesco's "Rhinocéros". What was so innovative about the play and the French avant-garde? This lecture examined these questions and explored how audiences could enjoy the Saitama performances of "Rhinocéros" through understanding the play in the context of French drama since seventeenth-century classicism.

5 岡田利規×高橋源一郎 トークイベント「ぼくたちの野球論」
Toshiki Okada + Genichiro Takahashi Talk

11/7 (Sat)
会場：la kagū 2Fレクチャースペースsōko
来場：65名
主催：新潮社
共催：ラカグ

la kagū 2F lecture space sōko
Audience: 65
Presented by Shinchosha
Co-presented by la kagū

『God Bless Baseball』の戯曲発売を記念し、本戯曲の作・演出を手がけた岡田利規と1988年の著書『優雅で感傷的な日本野球』で第1回三島由紀夫賞を受賞した高橋源一郎を迎えて開催された対談イベント。野球そのものではなく、それをモチーフにすることで見えてくる社会と人との関係性を問うてきた二人が、舞台の内容を振り返りながら、互いの考える表現のありかたについて語りあった。

To celebrate the publication of the playscript of "God Bless Baseball", writer and director Toshiki Okada was joined by award-winning novelist Genichiro Takahashi for this talk about Okada's play, baseball, and what the sport reveals about society and human relations.

5-4 人材育成プログラム　Training Program

F/Tサポーター　F/T Volunteer Supporters

F/Tを応援し、一緒に盛り上げるボランティア・スタッフ「F/Tクルー」を、F/T15からは装いも新たに「F/Tサポーター」に改称、新プログラムとして始動させた。今年度は【フェスティバル運営サポート】【プロジェクトサポート】【自主活動】の3本柱で、人とコミュニティを育むプログラムを展開。サポーターには、興味を持った段階でいつでも登録することができ、F/T15閉幕時点で258名の登録があった。【フェスティバル運営サポート】へは、78名が参加。未経験者でも活躍できるように、事前にフロント研修会を実施した。当日のチケットもぎりや場内整理、会場仕込みのサポートを通じて、フェスティバルの現場を支えた。【プロジェクトサポート】では、会期前から「盆踊り隊」「はっぴ作り隊」「音楽隊」など演目に付随した多様な活動を実施し、149名が参加。フェスティバルを盛り上げた。【自主活動】では、「F/Tで遊ぼう～はなす・みつける・つくるワークショップ～」を通して、主体的にフェスティバルに関わる場を設けた。「静岡から社会と芸術について考える合宿ワークショップ」などの活動で注目を集める白川陽一を進行役に迎え、全5回実施。会場周辺をリサーチし、参加者と対話を深める中でF/T15での自主企画を企画・実行するという趣旨で、「豊島区おもいでかるた」「壁新聞プロジェクト」「感想をふくらまそうプロジェクト」の3つの企画が誕生。ワークショップ参加者の12名を中心に、来場者や立教大学落語研究会などを巻き込んだ、新たな出会いと賑わいが創出された。

F/T Crew, the regular program of volunteers who support the running of the festival's events, was renamed and reorganized into the F/T Volunteer Supporters. It was formulated around three sub-programs: Festival Assistants, Project Supporters, and Independent Supporters. Volunteers were able to register for the programs at any point and by the end of F/T15 there were a total of 258 participants. 78 registered for the Festival Assistants program, undergoing training for front-of-desk duties so that even those with no experience could take part. The volunteers assisted in the day-to-day operation of the festival including dealing with tickets at the venues, and helping with arranging and preparing venues. The 149 members of the Project Supporters program were involved with a range of specific teams and tasks for a production, including as Bon dancers, *happi* costume makers, and musicians. The Independent Supporters program was a new initiative and was designed for volunteers to take the lead in finding ways to participate in the festival. Joined by Yoichi Shirakawa, known for his art-themed workshops in Shizuoka, as the facilitator, there were a total of five sessions. Three initiatives were devised that aimed to create independent projects that could deepen dialogue with participants at the festival based on research of the venue areas. The 12 workshop participants were also joined by general visitors and a Rakugo research group from Rikkyo University.

F/Tサポーター
登録者数：258名
Volunteer Supporters
Total: 258

フェスティバル運営サポート
活動人数：78名
Festival Assistants
78

プロジェクトサポート
活動人数：149名
Project Supporters
149

- 「盆踊り隊」Bon Dance Team
- 「はっぴ作り隊」Happi Costume Makers
- 「音楽隊」Musicians
- 「大風呂敷修復隊」Oburoshiki Repair Team

自主活動
活動人数：12名
Independent Supporters
12

- 「F/Tで遊ぼう～はなす・みつける・つくるワークショップ～」Workshop
- 「豊島区思い出かるた」Toshima City Memory Cards
- 「壁新聞プロジェクト」Wall Newspaper Project
- 「感想をふくらまそうプロジェクト」Expanding Impressions Project

フェスティバル運営サポート
Festival Assistants

盆踊り隊
Bon Dance Team

F/Tで遊ぼう～はなす・みつける・つくるワークショップ～
Work Shop

インターン　Internship Program

舞台芸術の仕事に興味を持ち、将来的にこのフィールドでの就業を考える人たちに向けて、業界の基礎知識を学び、実際に制作現場を経験する機会をつくる、人材育成インターンシップ・プログラムを実施。F/T15インターンには、大学生を中心とした28名が参加し、制作部門と広報部門に分かれて活動した。会期前には、全10回の基礎知識講座を開催。制作現場の生の声や、豊島区の文化政策、海外フェスティバルの現状などをさまざまな事例を交えながら学び、業界を取り巻く背景について多角的に理解を深めた。制作部門では、上演に伴う事務作業から稽古場のサポート、会場の装飾や本番業務など、制作に関わる一連の業務を経験した。また、自主企画として「池袋ふくろうMAP」を製作。来場者が観劇前後に池袋を回遊し、ふくろうに溢れた街の魅力と出会う機会を創出した。広報部門では、周知活動にあたっての事務作業や、展示の企画から会場デザインまでの業務を担った。参加者からは、キャリアプランを考えるうえでいい経験となったという声が聞かれた。

F/T's Internship Program offers opportunities for people with an interest in a career in the performing arts to learn the basics of the industry and gain actual hands-on experience. F/T15 had 28 interns, most of whom were university students, assisting the production team and PR department. Prior to the opening of the festival, the interns attended 10 training sessions where they learnt about working as a producer, Toshima City's cultural policies, and overseas festivals. Having attained a deeper and multi-faceted understanding of the background of the industry, the production interns assisted in office administration and rehearsals in the lead-up to the start of performances, and gained experience in setting up the venues and assisting on the day of the performances. The interns also created a map of Ikebukuro as their own self-organized project to offer opportunities for audiences to encounter some of the interesting places in the Ikebukuro area before and after watching a show. The interns assigned to the PR team helped to plan exhibits and design the venues, in addition to general office duties related to publicizing the festival. Participants in the program commented that their internships gave them valuable input for thinking about their future careers.

F/Tキャンパス　F/T Campus

F/Tキャンパスは、文化政策や芸術・演劇を学ぶさまざまな大学の学生同士が共に学び、交流し、考える機会をもつことができる場として企画され、11月20日～23日にかけてパイロット事業として実施された。東京・静岡・京都・大阪から計26名の大学生・大学院生が参加し、うち半数の学生は宿泊も共にした。プログラムは夜：観劇→午前中：ディスカッション→午後：選択ゼミのサイクルからなり、ディスカッションでは実際に観劇した作品の演出家（岡田利規・三浦基の各氏）との対話も行われた。選択ゼミは【F/Tキャンパスでの体験をもとに演劇をつくってみる／講師：瀬戸山美咲】、【F/Tキャンパスで観る作品を歴史的・理論的にとらえてみる／講師：萩原健】、【ロジックモデルを使ってF/Tのインパクトを考えてみる／講師：稲村太郎】の3コースが開催され、最終日に行われた合同ゼミでは各ゼミによる発表を通して内容を共有した。

F/T Campus brought together cultural policy, arts and theatre students from different colleges. It was held as a pilot project from November 20th to November 23rd with a total of 26 students (undergraduates and postgraduates) from Tokyo, Shizuoka, Kyoto and Osaka, of whom half also stayed together during the event. The program involved seeming a performance at night and then engaging in a discussion about it the following morning, followed by a seminar in the afternoon. During the discussion sessions, students could talk directly with directors Toshiki Okada and Motoi Miura, whose work they saw, while for the seminar there was a choice of three classes: "Create theatre based on your experiences by F/T Campus" (tutor: Misaki Setoyama), "Interpreting the performances from historical and theoretical perspectives" (tutor: Ken Hagiwara-Wallentowitz), and "Using logic to think about the impact of F/T" (tutor: Taro Inamura). On the final day, there was a joint seminar at which the conclusions of each class were shared with everyone.

6 同時開催 アジア舞台芸術祭2015 Asian Performing Arts Festival 2015

アジア舞台芸術祭2015について

11/13 (Fri) – 11/15 (Sun)

アジア舞台芸術祭は、舞台芸術作品の国際共同制作を通じて、アジアにおける文化交流と相互理解を促進するとともに優れた人材や作品を発掘し、芸術・文化の振興に貢献することを目指している。

今年は、アジアの若手アーティストが東京に集い小作品の共同制作・発表を行う「国際共同制作ワークショップ」を3作品、前年に制作・発表された小作品をフルサイズ化した「国際共同クリエーション」1作品の上演を行った。また、これらの国同制作の現場で、未来の舞台芸術界を担う新しい才能の育成プログラム「APAFアートキャンプ(舞台芸術国際共同制作人材育成事業)」を実施した。

The Asian Performing Arts Festival aspires to develop mutual understanding and cultural exchange in Asia through international theatre co-productions, as well as discover new human resources and theatre works, and help spread new work around the world. This year, young artists from around Asia gathered in Tokyo to create and present three small-scale plays in the Workshop for International Collaboration program, as well as a full performance of a play developed at last year's workshops in the Creation through International Collaborations program. In addition, the APAF Art Camp (Performing Arts International Collaboration Intensive Course) aimed to develop new talent for the future of the performing arts scene through these international co-productions.

国際共同クリエーション公演

『黄金のごはん食堂』 演出:ソ・ジヘ

Creation through International Collaborations
"Gold Rice Restaurant"
Direction: Jihye Suh (Korea)

11/13 (Fri) – 11/15 (Sun)
東京芸術劇場シアターイースト
全3ステージ
来場388名

Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)
Performances: 3
Audience: 388

「本物の食べ物が手に入りにくくなり、イミテーションフードが当たり前になる時代」を描いた本作品は、昨年、「米/稲〜食文化の共通性と差異について〜」というテーマのもと、約15分の小作品として韓国の演出家ソ・ジヘ氏を中心に制作された。

今年は、主要な場面を残しつつ、より細やかな背景描写を施し、さらに、タイの身体表現アドバイザーのティラワット・ムンウィライ氏によるアクロバティックな演出を加えたフルサイズ作品として上演された。

本作品の国際共同制作を通して、ソ・ジヘ氏は、「日本人俳優は抑制しがちで、韓国は全てバーッと開けっぴろげに表現する」が、「悲しみの表現においては日韓共通していた」と感情表現の違いに関心を寄せた。

時にユーモアも交えて描かれた舞台だが、「戦争」や「食」といったシリアスなテーマについて、改めて考えさせられたという声も多く寄せられた。

This play was set in the near future where real food is so scarce people have "imitation food" instead. It was developed out of the 15-minute play originally produced by Korean director Jihye Suh at last year's festival on the theme of shared and differing rice food cultures. This full version retained the main scenes but added more detail and background to the story, as well as physical theatre by the Thai director Teerawat Mulvilai. Suh commented that while the Japanese performers tend to restrain themselves, in Korea everything is expressed more openly. However, Japanese and Koreans express sadness in the same way, she said. Though a frequently funny play, "Gold Rice Restaurant" also dealt with serious topics like war and food, and made audiences think again about these issues.

国際共同制作ワークショップ Workshop for International Collaboration

11/13 (Fri) – 11/14 (Sat)
東京芸術劇場シアターイースト
全2ステージ
来場198名

Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)
Performances: 2
Audience: 198

11/10 (Tue)
ワークショップ公開リハーサル
水天宮ピット 小スタジオ1.2

Open Rehearsal
Suitengu Pit (Small Studio 1-2)

インドネシア、フィリピン、台湾の3つの国と地域の演出家を中心とした3グループで実施された。

本芸術祭プロデューサーの宮城聰が設定したテーマ「雨」をめぐって、各グループがお互いの共通性と差異を見つけ、「交互に影響し合い、変容し続ける文化」を感じながら、小作品の共同制作・成果発表(上演)を行った。

『ペットボトルの中の雨』 演出:イベット・スルガナ・ユガ(インドネシア)
『TERU TERU』 演出:タックス・ルタキオ(フィリピン)
『焦土』 演出:ジョン・ボーユエン(台湾)

This year's workshop program featured three groups, including directors from Indonesia, the Philippines, and Taiwan. Based on the theme of rain as set by festival director Satoshi Miyagi, the groups discovered what they shared and their respective differences while also sensing how cultures mutually influence themselves and continue to change. The resulting mini plays were then presented for audiences.

"Rain in Plastic Bottles" Direction: Ibed Surgana Yuga (Indonesia)
"TERU TERU!" Direction: Tuxqs Rutaquio (Philippines)
"Purgatory" Direction: Po-yuan Chung (Taiwan)

APAFアートキャンプ(舞台芸術国際共同制作人材育成事業) APAF Art Camp (Performing Arts International Collaboration Intensive Course)

アジア舞台芸術祭期間中に国際共同制作の現場において、最終成果物である作品上演のみではなく、作品化に至るまでの「プロセス」や「プログレス」に焦点を当てた育成プログラムを実施した。

参加者は、稽古見学や作品観劇、レクチャーといった「インプット」と、第一線で活躍する演出家や参加者間でのディスカッション等の「アウトプット」を繰り返し、参加者相互に刺激しあいながら、自身の創り手としての「軸」をしっかり築くことを目指した。

This training program focused on process and progress in the development of theatre work in the international co-productions at the festival, as opposed to just presenting final results. Featuring both input (watching rehearsals and performances, and attending lectures) and output (discussions with leading directors and between participants), the trainees offered each other mutual inspiration in this program that aimed for each participant to construct their own creative axis.

一般公開プログラム
Public Program

11/10 (Tue) フォーラム
講師:ソ・ジヘ、ティラワット・ムンウィライ
『黄金のごはん食堂』クリエーション公演をめぐって
会場:水天宮ピット 中スタジオ2
来場:68名

11/10 (Tue) Forum
On Staging "Gold Rice Restaurant"
Lecturers: Jihye Suh, Teerawat Mulvilai
Venue: Suitengu Pit (Middle Studio 2)
Audience: 68

11/14 (Sat) ラウンドテーブル「コラボレーションの意義、その可能性」
登壇者:
ショーネッド・ヒューズ(イギリス/ダンサー、振付家)
多田淳之介(演出家、<東京デスロック>主宰)
チョイ・カファイ(シンガポール/演出家、マルチクリエーター)
フィリップ・ブスマン(ドイツ/ビデオアーティスト、舞台美術家)
丸岡ひろみ(TPAM in Yokohama ディレクター、国際舞台芸術交流センター理事長)
宮城聰(演出家、芸術総監督、アジア舞台芸術祭プロデューサー)
司会:藤原ちから(批評家、編集者、BricolaQ主宰、本牧アートプロジェクト2015プログラムディレクター)
会場:東京芸術劇場 シンフォニースペース
来場:21名

1/14 (Sat) Roundtable: The Significance and Potential of Collaboration
Panelists:
Sioned Huws (UK / dance, choreographer)
Junnosuke Tada (Japan / director, head of Tokyo Deathlock)
Choy Ka Fai (Singapore / director, performance maker, speculative designer)
Philip Bussmann (Germany / video artist, stage designer)
Hiromi Maruoka (Japan / director of TPAM in Yokohama, president of PARC)
Satoshi Miyagi (Japan / director, general artistic director of SPAC, producer of Asian Performing Arts Festival)
Moderator: Chikara Fujiwara (Japan / critic, editor, director of BricolaQ, program director of Honmoku Art Project 2015)
Venue: Tokyo Metropolitan Theatre (Symphony Space)
Audience: 21

11/15 (Sun) フォーラム「国際共同制作WSをめぐって」
登壇者:ワークショップ演出家・出演者
会場:東京芸術劇場 シアターイースト
来場:35名

11/15 (Sun) Forum: On the Workshop for International Collaboration
Panelists: workshop directors and performers
Venue: Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)
Audience: 35

11/17 (Tue) 最終プレゼンテーション
登壇者:APAFアートキャンプ参加者
会場:東京芸術劇場 アトリエイースト
来場:52名

11/17 (Tue) Final Presentations
Panelists: APAF Art Camp participants
Venue: Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre West)
Audience:52

問合せ
アジア舞台芸術祭実行委員会事務局
TEL: 03-5388-3150 E-MAIL:apaf-tokyo@circus.ocn.ne.jp

主催:アジア舞台芸術祭実行委員会(構成団体:東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団、公益財団法人東京観光財団)、豊島区※
共催:フェスティバル/トーキョー実行委員会※
助成:平成27年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業(池袋/としま/東京アーツプロジェクト事業)※、独立行政法人 国際交流基金、公益財団法人セゾン文化財団※
※APAFアートキャンプ(舞台芸術国際共同制作人材育成事業)

Inquiries: APAF Production Office
Tel: +81 (0)3-5388-3150 E-mail: apaf-tokyo@circus.ocn.ne.jp

Presented by Asian Performing Arts Festival Executive Committee (Tokyo Metropolitan Government, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture, Tokyo Convention & Visitors Bureau) and Toshima City (for APAF Art Camp only)
APAF Art Camp co-presented by Festival/Tokyo Executive Committee
Supported by Agency for Cultural Affairs (regional art and cultural creativity initiative 2015) (for APAF Art Camp only), the Japan Foundation, and the Saison Foundation (for APAF Art Camp only)

7 連携プログラム F/T Affiliated Program

フェスティバル/トーキョー15開幕直前の2015年9月から会期中の11月・12月にわたって、都内および東京近郊で開催される公演の中でも、とりわけ高い現代性と豊かなオリジナリティを持つ国内外の演劇やダンスの18演目を、F/T15連携プログラムとして紹介した。

From September to December 2015, many other performances and theatre events took place in Tokyo and the surrounding area. These 18 partner productions, happening around the same time as Festival/Tokyo 2015, demonstrate the originality and diversity of the local performing arts scene..

STスポット舞台芸術フェスティバル
『ナビゲーションズ』
構成・演出：相模友士郎
主催：NPO法人STスポット横浜、相模友士郎

ST Spot Performing Arts Festival
"NAViGATIONS"
Concept, Direction: Yujiro Sagami
Presented by ST Spot Yokohama, Yujiro Sagami

9/25 (Fri) – 9/27 (Sun)
STスポット
全4ステージ
来場：101名
Venue: ST Spot
Performances: 4
Audience: 101

シアターXカイ プロデュース
日本・イスラエル・ポーランド共同創造
ヴィトカッツイ原作の『母』
構成・演出：ルティ・カネル（イスラエル/ポーランド）
主催：シアターX(カイ)

Theater X cai
Japan-Israel-Poland Collaboration Theatre Project
Witkacy's "Matka"
Adaptation, Direction: Ruth Kanner (Israel/Poland)
Presented by Theater X cai

10/1 (Thu) – 10/4 (Sun)
東京・両国シアターX
全4ステージ
来場：539名
Venue: Theater X cai
Performances: 4
Audience: 539

FT

『Needles and Opium 針とアヘン
～マイルス・デイヴィスとジャン・コクトーの幻影～』
作・演出：ロベール・ルパージュ
主催：世田谷パブリックシアター（公益財団法人せたがや文化財団）

"Needles and Opium"
Ex Machina
Text, Direction: Robert Lepage
Presented by Setagaya Public Theatre (Setagaya Arts Foundation)

10/9 (Fri) – 10/12 (Mon)
世田谷パブリックシアター
全5ステージ
来場：2,073名
Venue: Setagaya Public Theatre
Performances: 5
Audience: 2,073

Dance New Air 2016 プレ公演
サイトスペシフィックシリーズvol.1
『"distant voices -carry on"～青山借景』
コンセプト・演出：ハイネ・アヴダル、篠崎由紀子
主催：Dance New Air（一般社団法人Dance Nippon Associates）、
株式会社ワコールアートセンター、NPO法人Offsite Dance Project

Dance New Air 2016 Site-Specific Series vol.1
"distant voices – carry on" ~ Aoyama Shakkei
Concept, Direction: Heine Avdal, Yukiko Shinozaki
Presented by Dance New Air (Dance Nippon Associates),
Wacoal Art Center, NPO Offsite Dance Project

10/10 (Sat) – 10/12 (Mon)
スパイラル
全5ステージ
来場：516名
Venue: Spiral
Performances: 5
Audience: 516

ストアハウスコレクション・日韓演劇週間①
『キョンスク、キョンスクの父』
コルモッキル（韓国）　作・演出：パク・クニョン

『烈々と燃え散りしあの花かんざしよ』
温泉ドラゴン（日本）　作・演出：シライケイタ

ストアハウスコレクション・日韓演劇週間②
『アリバイ年代記』
ドリームプレイ（韓国）　作・演出：キム・ジェヨプ

『黄色い叫び』
中津留章仁LOVERS（日本）　作・演出：中津留章仁

主催：ストアハウス

Storehouse Collection Japan-Korea Theatre Week 1
"Kyung-sook, Kyung-sook's Father"
Golnokil
Text, Direction: Kunhyung Park
"Story of Yeol and Fumi"
Onsen Dragon
Text, Direction: Keita Shirai

Storehouse Collection Japan-Korea Theatre Week 2
"Chronicle of Alibis"
Dreamplay These 21
Text, Direction: Jaeyeop Kim
"Yellow Scream"
Nakatsuru Akihito Lovers
Text, Direction: Akihito Nakatsuru

Presented by Ueno Storehouse

①10/14 (Wed) – 10/18 (Sun)
②10/21 (Wed) – 10/25 (Sun)
上野ストアハウス
全20ステージ
来場：1,588名
Venue: Ueno Storehouse
Performances: 20
Audience: 1,588

ルーマニア国立ラドゥ・スタンカ劇場
『ガリバー旅行記』『オイディプス』
演出：シルヴィウ・プルカレーテ
主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
東京都／アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）

Radu Stanca National Theatre from Sibiu
"Gulliver's Travels"
"Oidip"
Direction: Silviu Purcărete
Presented by Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Tokyo Metropolitan Government & Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)

10/15 (Thu) – 10/23 (Fri)
東京芸術劇場 プレイハウス
全6ステージ
来場：2,379名
Venue: Tokyo Metropolitan Theatre (Playhouse)
Performances: 6
Audience: 2,379

野村万蔵プロデュース「伝統芸能in自由学園明日館」vol.1
『獅子の祝彩』
企画・監修：野村万蔵
主催：公益財団法人としま未来文化財団、豊島区

Traditional Stage Arts in Jiyugakuen Myonichikan 1
Presented by Manzou Nomura
"Lion Festival"
Planning, Supervision: Manzou Nomura
Presented by Toshima Future Culture Foundation, Toshima City

11/2 (Mon)
自由学園明日館 芝庭
全1ステージ
来場：261名
Venue: Jiyugakuen Myonichikan (garden)
Performances: 1
Audience: 261

FT

吉祥寺シアター10周年記念事業
『タイタス・アンドロニカス』*
『女殺油地獄』**
劇団山の手事情社
原作：W.シェイクスピア（タイタス・アンドロニカス）、
近松門左衛門（女殺油地獄）
構成・演出：安田雅弘
主催：有限会社アップタウンプロダクション、劇団山の手事情社

Kichijoji Theatre 10th Anniversary
"Titus Andronicus"*
"The Woman-Killer and the Hell of Oil"**
Yamanote Jijosha
Text: William Shakespeare, Chikamatsu Monzaemon
Concept, Direction: Masahiro Yasuda
Presented by updown Production, Yamanote Jijosha

11/6 （Fri）– 11/8 （Sun）*
11/12 (Thu) – 11/16 (Mon)**
吉祥寺シアター
全10ステージ
来場：1,826名
Venue: Kichijoji Theatre
Performances: 10
Audience: 1,826

FT

現代能楽集Ⅷ『道玄坂綺譚』
～三島由紀夫作　近代能楽集「卒塔婆小町」「熊野」より
作・演出：マキノノゾミ　企画・監修：野村萬斎
主催：世田谷パブリックシアター（公益財団法人せたがや文化財団）

Contemporary Noh Collection VIII "Dogenzaka-Kitan"
Adapted from Yukio Mishima's Modern Noh Plays
"Sotoba-Komachi" and "Yuya"
Text, Direction: Nozomi Makino
Planning, Supervision: Mansai Nomura
Presented by Setagaya Public Theatre (Setagaya Arts Foundation)

11/8 (Sun) – 11/21 (Sat)
世田谷パブリックシアター
全12ステージ
来場：5,227名
Venue: Setagaya Public Theatre
Performances: 12
Audience: 5,227

FT

座・高円寺 秋の劇場20日本劇作家協会プログラム
カムカムミニキーナ二十五周年記念公演第二弾
『＞（ダイナリィ）』～大稲荷・狐色になるまで入魂～
カムカムミニキーナ　作・演出：松村 武
主催・企画・製作：カムカムミニキーナ

Za-Koenji Autumn Program 20
Japanese Playwrights Association Series
"Dinary"
Comecome minikina
Text, Direction: Takeshi Matsumura
Presented, planned & produced by Comecome minikina

11/12 (Thu) – 11/22 (Sun)
座・高円寺1
全14ステージ
来場：2,516名
Venue: Za-Koenji 1
Performances: 14
Audience: 2,516

FT

座・高円寺 秋の劇場21日本劇作家協会プログラム
燐光群『お召し列車』
作・演出：坂手洋二
主催：燐光群

Za-Koenji Autumn Program 21
Japanese Playwrights Association Series
"The Imperial Train"
RINKOGUN Theatre Company
Text, Direction: Yoji Sakate
Presented by RINKOGUN Theatre Company

11/27 (Fri) – 12/6 (Sun)
座・高円寺1
全11ステージ
来場：1,775名
Venue: Za-Koenji 1
Performances: 11
Audience: 1,775

FT

『われらの血がしょうたい』
範宙遊泳　作・演出：山本卓卓
主催：範宙遊泳、さんかくのまど、
NPO法人アートプラットフォーム（急な坂スタジオ）

"Colours of Our Blood"
Theatre Collective HANCHU-YUEI
Text, Direction: Suguru Yamamoto
Presented by Theatre Collective HANCHU-YUEI,
NPO Art Platform (Steep Slope Studio)

12/4 (Fri) – 12/14 (Mon)
のげシャーレ（横浜にぎわい座 地下2階）
全13ステージ
来場：810名
Venue: Yokohama Nigiwaiza
Performances: 13
Audience: 810

FT

Sound Live Tokyo 2015
『初期シェーカー聖歌：
レコード・アルバムの上演』
ウースター・グループ　　演出：ケイト・ヴァルク
主催：PARC – 国際舞台芸術交流センター

Sound Live Tokyo 2015
"Early Shaker Spirituals: A Record Album Interpretation"
The Wooster Group
Direction: Kate Valk
Presented by PARC - Japan Center, Pacific Basin Arts Communication

12/22 (Tue) – 12/23 (Wed)
スパイラルホール
全3ステージ
来場：399名
Venue: Spiral Hall
Performances: 3
Audience: 399

FT

FT はF/Tチケットセンターにて一般前売のみ取扱い

8 広報、宣伝
Publicty & Promotion

8-1 メインビジュアル　Graphic Design

アートディレクターに多様なメディアを総合的に使う広報戦略の専門家である氏家啓雄を起用し、ウェブサイトを含む新たなビジュアル展開を行った。

ロゴとイラストが掛け合わされたメインビジュアルは、FとTの文字の間から、演劇や音楽などが湧き出してくるという明るいイメージを描いている。イラストはパリ在住の新進のイラストレーターnaomi@paris,tokyoが手がけた。色彩豊かなメインビジュアルは、コンセプトである『融解する境界』という堅いテーマを中和しつつ、街にあって通りゆく人々の目をひく印象的なものとなった。

F/T15 welcomed art director Yoshio Ujiie, a specialist in publicity strategies comprehensively employing a variety of media, to handle the renewal of the festival website design this year. The main graphic design paired the new logo with illustrations to convey the positive image of theatre and music gushing out from between the letters F and T. The illustrations were created by the Paris-based illustrator naomi@paris,tokyo. The vibrant graphic design for the festival helped to neutralize the somewhat inaccessible 2015 theme of Border Fusion, and could also attract the interest of passersby.

F/T15　ポスター　Poster
AD：氏家啓雄（有限会社氏家プランニングオフィス）
illustration: naomi@paris,tokyo D：市川きよあき事務所
Art Direction: Yoshio Ujiie（Ujiie planning office）
Illustrations: naomi@paris,tokyo　Design: Kiyoaki Ichikawa

8-2 宣材　Publicity Materials

F/T15全プログラムの詳細、チケット情報、スケジュールを一括で読むことができる小冊子を作成。DM会員への郵送から、施設への置きチラシ、さまざまな公演への折込みにもすべてこの小冊子を使用。A5サイズ横長という大きさ、形態が手に取りやすく読みやすくなったと好評であった。

A small booklet was produced (in Japanese) providing an overview of the festival and the programs, as well as ticket and schedule information. The booklet was sent to the festival mailing list and was also left at certain venues, in addition to being distributed to audiences at other performances. The compact A5 oblong size also made it easy to hold and read.

	仕様　Format	配布期間　Distribution Period	印刷部数　Print Run
ティザーチラシ 1号 Teaser Flyer 1	A4両面 Double-sided A4	6月1日～7月末 June 1st – end of July	30,000
ティザーチラシ 2号 Teaser Flyer 2	A4両面 Double-sided A4	7月28日～会期中 July 28th – festival period	37,000
小冊子 Booklet	A5横長仕上がり　40P A5 (oblong), 40 pages	9月7日～会期中 September 7th – festival period	80,000
各演目チラシ Production Flyers	各演目による Depends on production	9月上旬～会期中 Early September – festival period	各演目 (per production) 30,000～80,000
ポスター Poster	B1、B2 B1, B2	9月中旬～会期中 Mid-September – festival period	750
当日パンフレット Performance Pamphlets	A5仕上がり3ッ折 A5, triple fold	各演目の会場にて At each venue	各演目の座席数に準じる Varies per venue

8-3 ウェブサイトおよびSNS　Website & Social Media

F/T15のウェブサイトは昨年度からの方針や構成を踏襲しつつユーザービリティを改善することを重視し、よりシンプルな設計で制作した。デザインはレスポンシブだが前年度のモバイルファーストの仕様ではなく、PCとモバイルは別レイアウトとした。それでもユーザーはモバイルがさらに5%上昇し、モバイル：PCの割合は7：3に迫る数字となっている。また、ラインアップ情報および各プログラムのチケット購入がユーザーの訪問目的の大多数であることを意識し、サイトトップに主催プログラムの一覧情報を掲載するとともにチケット購入サイト（外部ASP）へ直リンクした。これらの施策によって、前年度から全体のセッション数は微減となったが、平均PVが3%、平均滞在時間が10%の増加、そして直帰率が7%、離脱率は3%減少しており、目標としていた「サイトの質の向上」が達成できたものと考えられる。

For the F/T15 website, improvements were made to usability based on the direction and structure started last year, resulting in a more minimal design. The design was responsive, though unlike last year's design that used a mobile-friendly structure the default, separate designs were created for the desktop and mobile websites. Mobile users increased by 5% to a mobile-to-desktop user ratio of 7:3. Since the majority of users visit the festival website to view information on the lineup of events and purchase tickets, an overview of the Main Program was placed on the top page along with a link to an external ASP ticket purchasing website. As a result, the overall number of sessions decreased compared to last year, but the average page views increased by 3% and the average time spent on a page rose by 10%. The bounce rate also dropped by 7% and the abandonment rate by 3%. As such, this year the festival website achieved its target of improving quality.

	F/T15（8/28～12/06） Before and During Festival（8/28-12/06）	会期中（10/31～12/06） During Festival（10/31-12/06）
セッション数 Sessions	120,780	62,409 （1,687/日 per day）
PV 数 Page views	312,634	145,797 （3,940/日 per day）
1訪問あたりPV数 Page views per visit	2.59	2.34
平均セッション時間 Average session length	02:28	02:08
平均ページ滞在時間 Average time spent on page	01:33	01:35

■ Facebookいいね!数　4,807件（前年＋637件）
Facebook Likes: 4,807 (+637 compared to last year)

■ Twitterフォロワー数　8,517件（前年＋852件）
Twitter Followers (Japanese account):
8,517 (+852 compared to last year)

8-4 掲載実績、広告換算費
Press Coverage Results & Advertising Value

総数：311 件　Total: 311		
内訳：	新聞 Newspapers	49 件
	雑誌・フリーペーパー Magazines/Free publications	42 件
	電波 Broadcasting	6 件
	WEB Online	214 件

広告換算額：約1億6000万円
Equivalent Advertising Value:
c. 160,000,000 JPY

※2016年2月5日現在
Correct as of February 5th, 2016

8-5 その他　Others

■ 屋外広告
Outdoor & Public Transport Advertising

フラッグ（池袋駅東口・西口界隈）・柱巻き広告（あうるすぽっと）
F/T15 flags(Ikebukuro Station East Exit and West Exit areas), column advertising(Owlspot Theater)

©Hideto Maesawa

©Hideto Maesawa

■ 交通広告
Public Transport Advertising

池袋駅校内B0・B1ポスター展開、東武東上線池袋駅、成増駅などB1・B2ポスター展開
B0 and B1 posters inside Ikebukuro Station,
B1 and B2 posters at Tobu Tojo Line Ikebukuro Station and Narimasu Station

9 収支、来場・参加者数、チケット

Earnings & Expenditure,　Audience & Participant Numbers, Tickets

9-1 F/T15収支　F/T15 Earnings & Expenditure

収入 Income

（千円／1,000 yen units）

豊島区負担金 Toshima City	9,000
アーツカウンシル東京負担金 Arts Council Tokyo	170,000
文化庁助成金 Agency for Cultural Affairs	65,950
国際交流基金アジアセンター共催分担金 Japan Foundation Asia Center	7,000
助成金・協賛金等 Other subsidies and sponsorship	1,300
事業収入 Income from activities	34,000
雑収入 Miscellaneous income	200
実行委員会負担金 Festival/Tokyo Executive Committee	3,000
合計 Total	290,450

2016年2月現在　Correct at February 2016

支出 Expenditure

（千円／1,000 yen units）

公演事業費 Productions	208,450
広報費 PR	32,000
事務局運営費 Administration	50,000
合計 Total	290,450

2016年2月現在　Correct at February 2016

9-2 来場・参加者数　Audience & Participant Numbers

	演目・企画数 Productions/Events	公演数 Performances	来場・参加者数 Audience/Participants
主催プログラム Main Program	12	65	34,612
主催企画 Related Events	3	-	415
関連イベント Satellite Events	5	-	275
人材育成プログラム Training Program	3	-	312
連携プログラム Affiliated Program	18	108	20,010
合計 Total	41	173	55,624

9-3 チケット　Tickets

■ 先行割引チケット

9月23日（水・祝）10:00〜9月26日（土）19:00

割引率：一般前売チケットの約30%OFF。枚数限定

　チケット販売において、F/T14で好評であった先行割引販売を引き続きおこなった。販売期間を1週間から4日間に絞ることで特別感を演出。結果いくつかの演目が発売初日に予定枚数を終了した。

■ Early Bird Discounts

September 23rd 10:00 – September 26th 19:00

Offering up to 30% off regular ticket prices (limited availability)

Following on from its success at F/T14, once again Festival/Tokyo offered an early bird discount prior to the release of general ticket sales. This year the one-week discount period was reduced to four days and many productions sold out their allotted tickets on the first day.

■ チケット一般発売

9月27日（日）10:00〜

　一般発売日より【F/Tならではのお得なチケット】であるセット券、ペア券、学生割引の販売も開始した。また、Webチケット購入システムの向上によりセット券などの予約手順が簡易になった。

■ チケット営業

　学生への営業を重点的に行い、大学や専門学校などへ教員やインターンを通じて営業チラシを配布し、一定の効果を生んだ。また大学にてF/Tについての特別講義を行い、認知度を上げた。

　さらに東京芸術劇場での、連携プログラムの公演中のロビーにて『地上に広がる大空（ウェンディ・シンドローム）』のチケット販売も行うなど、客層を絞った個別演目の営業にも力を入れた。

■ Tickets went on general

sale from 10:00 on September 27th.

In addition to regular tickets, F/T also offered sets and discounted tickets such as the Festival Passes, Pair Tickets, and Student Tickets. The online ticket purchasing system was improved, making it easier to reserve tickets.

■ Ticket Promotion

In order to promote the festival among students, leaflets were distributed to universities and colleges through teachers and interns, achieving some results. A special lecture about F/T was also held at a university, raising awareness about the festival. Efforts were also put into targeting certain types of audiences for specific productions. For example, tickets were sold for“All the Sky Above the Earth (Wendy’s Syndrome)” in the lobby of the F/T Metropolitan Theatre during performances of F/T Affiliated Program productions.

■ チケットの券種と料金　Ticket Types and Prices

	席種	一般前売 General Tickets	先行割引 Early Bird Discounts	ペア Pair Tickets	5演目セット Festival Pass (5 Performances)	3演目セット Festival Pass (3 Performances)	学生 Student Tickets	高校生以下 High School Students and Under Tickets
1 フェスティバルFUKUSHIMA!@池袋西口公園 Festival Fukushima! @Ikebukuro Nishiguchi Park	野外	入場無料 Free						
2 真夏の夜の夢 A Midsummer Night’s Dream	自由席	¥4,000	¥2,800	¥7,200	¥3,200	¥3,400	¥2,600	¥1,000
3 ゾンビオペラ『死の舞踏』 Zombie Opera “Danse Macabre”	自由席	¥3,500	¥2,500	¥6,300	¥2,800	¥3,000	¥2,300	¥1,000
4 ミステリヤ・ブッフ Mystery-Bouffe	自由席	¥4,000	¥2,800	¥7,200	¥3,200	¥3,400	¥2,600	¥1,000
5 ブルーシート Blue Tarp	野外 自由席	¥3,500	¥2,500	¥6,300	¥2,800	¥3,000	¥2,500	¥1,000
	野外 立見席	¥2,500	–	¥4,500	¥2,000	¥2,200	¥2,000	
6 God Bless Baseball God Bless Baseball	全席指定	¥4,500	¥3,300	¥8,100	¥3,700	¥4,000	¥3,000	¥1,000
7 颱風奇譚（たいふう） 태풍기담 A Typhoon’s Tale	自由席	¥4,000	¥2,800	¥7,200	¥3,200	¥3,400	¥2,600	¥1,000
8 地上に広がる大空（ウェンディ・シンドローム） All the Sky Above the Earth（Wendy’s Syndrome）	全席指定	¥5,500	¥3,800	¥9,900	¥4,400	¥4,700	¥3,000	¥1,000
9 犀（サイ） Rhinocéros	全席指定 S席	¥6,000	–	–	¥5,400	¥5,400	U-25 ¥4,000	
	全席指定 A席	¥4,000	–	–	–	–	U-25 ¥2,000	
10 LOGOBI 06 Logobi 06	自由席	¥3,500	¥2,500	¥6,300	¥2,800	¥3,000	¥2,300	¥1,000
11 Being Faust - Enter Mephisto Being Faust – Enter Mephisto	参加型	¥2,000	¥1,400	¥3,600	¥1,600	¥1,700	¥1,300	¥1,000
12 ラウンドアバウト・イン・ヤンゴン Roundabout in Yangon	Aプロ 自由席	¥2,000	¥1,400	¥3,600	¥1,600	¥1,700	¥1,300	¥1,000
	Bプロ 自由席	¥2,500	¥1,800	¥4,500	¥2,000	¥2,200	¥1,600	
	A・B セット券	¥4,000	¥2,800	¥7,200	¥3,200	¥3,400	¥2,600	–
シンポジウム Sympoisum	–	入場無料（予約優先）　Free（priority to reservations）						
F/Tトーク F/T Talks	–	各回500円（予約優先・当日共通）　¥500 each（priority to reservations）						
庁舎まるごとミュージアム・豊島区立図書館展示 Exhibition	–	入場無料 Free						

10 開催スケジュール

Festival Schedule

	10/30 Fri	10/31 Sat	11/1 Sun	11/2 Mon	11/3 Tue	11/4 Wed	11/5 Thu	11/6 Fri	11/7 Sat	11/8 Sun	11/9 Mon	11/10 Tue	11/11 Wed	11/12 Thu	11/13 Fri	11/14 Sat	11/15 Sun	11/16 Mon	11/17 Tue	11/18 Wed	11/19 Thu	11/20 Fri	11/21 Sat	11/22 Sun	11/23 Mon	11/24 Tue	11/25 Wed	11/26 Thu	11/27 Fri	11/28 Sat	11/29 Sun	11/30 Mon	12/1 Tue	12/2 Wed	12/3 Thu	12/4 Fri	12/5 Sat	12/6 Sun
池袋西口公園 Ikebukuro Nishiguchi Park		『フェスティバルFUKUSHIMA!@池袋西口公園』 "Festival Fukushima! @Ikebukuro Nishiguchi Park" 15:00〜20:00	13:00〜18:00																																			
東京芸術劇場 プレイハウス Tokyo Metropolitan Theatre (Playhouse)																							『地上に広がる大空(ウェンディ・シンドローム)』 "All the Sky Above the Earth (Wendy's Syndrome)" 18:00	☆18:00	14:00														
東京芸術劇場 シアターイースト Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)															アジア舞台芸術祭 Asian Performing Arts Festival 2015						『Being Faust – Enter Mephisto』 "Being Faust – Enter Mephisto" 17:00	17:00	12:00 16:00	12:00 16:00				『颱風(たいふう)奇譚 태풍기담』 "A Typhoon's Tale" 19:00	15:00★	13:00 18:00★	13:00										
東京芸術劇場 アトリエイースト Tokyo Metropolitan Theatre (Atelier East)																		アジア舞台芸術祭 APAF Art Camp		ミャンマー映画特集 Myanmar Film Screenings 18:00 a トーク		18:00 a 19:45 b	13:00 c 14:45 b ⑤ 17:45	13:00 a 14:45 b	18:00 c 19:45 a ⑥ 14:00	トーク・映像「ポーランド演劇の現在形」 Talks/Screenings: "Polish Theatre Today" 19:00	19:00	19:00		15:30	15:30									
あうるすぽっと Owlspot Theater																					『God Bless Baseball』 "God Bless Baseball" 19:30	19:30	17:00★	14:00	19:30	19:30	19:30	15:00★	19:30	14:00	14:00						
にしすがも創造舎 Nishi-Sugamo Arts Factory		『真夏の夜の夢』 "A Midsummer Night's Dream" 19:00	15:00★◎	19:00	13:00◇ 18:00★								ゾンビオペラ『死の舞踏』 Zombie Opera "Danse Macabre" 19:30	19:30★	19:30★	14:30◎						『ミステリヤ・ブッフ』 "Mystery-Bouffe" 19:30	19:30	19:30	19:30	休演日	19:30	19:30	19:30	19:30									
豊島区 旧第十中学校 Former Toshima City 10th Junior High School															『ブルーシート』 "Blue Tarp"	11:00 14:30	11:00 14:30																			『ブルーシート』 "Blue Tarp" 14:30	11:00 14:30	11:00
彩の国さいたま 芸術劇場 Saitama Arts Theater																							『犀(サイ)』 "Rhinocéros" 19:00	15:00◎	15:00★												
アサヒ・アートスクエア Asahi Art Square												『ラウンドアバウト・イン・ヤンゴン』 "Roundabout in Yangon"			15:00★ A B 19:30	15:00 A B 19:30	15:00★ A										『LOGOBI 06』 "Logobi 06" 17:00	19:30★	13:00 17:00	17:00									
その他の会場 Other Venues	① 14:00 19:00				② 16:00			③ 19:00	16:00				④ 20:30																									

★ポスト・パフォーマンストークあり　Post - performance talk　☆プレ・パフォーマンストークあり　Pre - performance talk　◎バックステージツアーあり　Backstage tour　◇ワールド・カフェあり　World Cafe event

展示　Exhibitions　10/1(Thu)-11/26(Thu)　豊島区役所内庁舎まるごとミュージアム・豊島区立中央図書館　Toshima City Office/ Toshima City　Central Library

①シンポジウム『アートフェスティバルの展望』　The Future of Arts Festivals (symposium)　会場:豊島区役所 としまセンタースクエア　Toshima City Office
②ミャンマー基礎知識トークセッション　Myanmar: The Basics (talk)　会場:ホテルグランドシティ レストランセゾン　Hotel Grand City Restaurant Saison
③トーク「多民族国家マレーシアにおけるパフォーミング・アーツ」　Performing Arts in Multi-Ethnic Malaysia (talk)　会場:ホテルグランドシティ レストランセゾン　Hotel Grand　City Restaurant Saison
④『The Monk』上映会・トーク　"The Monk" (screening & talk)　会場:ポレポレ東中野　Theater Pole-Pole Higashi-Nakano
⑤『Being Faust - Enter Mephisto』関連トーク　"Being Faust – Enter Mephisto" Talk　会場:東京芸術劇場 アトリエイースト　Tokyo Metropolitan Theatre (Atelier East)
⑥トーク「中国現代演劇の現在形」　Chinese Theatre Today (talk)　会場:東京芸術劇場 アトリエイースト　Tokyo Metropolitan Theatre (Atelier East)

ミャンマー映画特集　Myanmar Film Screenings
a『The Monk』"The Monk"
b『Beauty of Tradition—ミャンマー民族音楽への旅—』
"Beauty of Tradition – Under the Sky of Yangon"
c『ナルギス ー 時間が止まった時』
"Nargis – When Time Stopped Breathing"

11 開催概要
About

名称　フェスティバル/トーキョー15
会期　2015年10月31日(土)-12月6日(日)
会場　東京芸術劇場
あうるすぽっと(豊島区立舞台芸術交流センター)
にしすがも創造舎
アサヒ・アートスクエア
彩の国さいたま芸術劇場
池袋西口公園
豊島区 旧第十中学校 ほか
プログラム数　主催プログラム　12演目・3企画
連携プログラム　18演目
主催　フェスティバル/トーキョー実行委員会
豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/NPO法人アートネットワーク・ジャパン、
アーツカウンシル東京・東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
共催　公益社団法人国際演劇協会日本センター
アジアシリーズ共催　独立行政法人国際交流基金アジアセンター
協賛　アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
後援　外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM
特別協力　西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、
株式会社サンシャインシティ、チャコット株式会社
協力　東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、
公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、
特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、ホテルメトロポリタン、
ホテル グランドシティ、池袋ホテル会
宣伝協力　株式会社ポスターハリス・カンパニー

平成27年度　文化庁　文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業
(池袋/としま/東京アーツプロジェクト事業、としま国際アートフェスティバル事業)

公益社団法人企業メセナ協議会　2021芸術・文化による社会創造ファンド採択事業

Name　Festival/Tokyo 2015 (F/T15)
Period　October 31st (Sat) to December 6th (Sun), 2015
Venues　Tokyo Metropolitan Theatre
Owlspot Theater
Nishi-Sugamo Arts Factory
Asahi Art Square
Saitama Arts Theater
Ikebukuro Nishiguchi Park
Former Toshima City 10th Junior High School, and more
Programs　F/T Main Program (12 productions, 3 event programs)
F/T Affiliated Program (18 productions)
Organizers　Festival/Tokyo Executive Committee,
Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ),
Arts Council Tokyo & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute
Asia Series co-produced by the Japan Foundation Asia Center
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, J-WAVE 81.3 FM
Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd.
In co-operation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association
PR Support: Poster Hari's Company

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2015

Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan
(2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture)

■ フェスティバル/トーキョー実行委員会

顧問　野村　萬　公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長、能楽師
福原義春　株式会社資生堂 名誉会長
名誉実行委員長　高野之夫　豊島区長
実行委員長　荻田　伍　アサヒグループホールディングス株式会社 相談役
副実行委員長　市村作知雄　NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 会長
栗原　章　豊島区文化商工部長
東澤　昭　公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長
委員　尾崎元規　公益社団法人企業メセナ協議会 理事長、花王株式会社 顧問
熊倉純子　東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 教授
斉藤幸博　株式会社資生堂企業文化部長
鈴木敦子　アサヒビール株式会社経営企画本部社会環境部 部長
鈴木正美　東京商工会議所豊島支部 会長
永井多恵子　公益社団法人国際演劇協会日本センター 会長
小澤弘一　豊島区文化商工部文化デザイン課長
岸　正人　公益財団法人としま未来文化財団 部長
蓮池奈緒子　NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
小島寛大　NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事
監事　鈴木さよ子　豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー　福井健策、北澤尚登(骨董通り法律事務所)

■ フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

ディレクターズコミッティ
代表　市村作知雄
副代表　小島寛大、河合千佳
メンバー　葦原円花、喜友名織江、十万亜紀子、長原理江、横堀応彦

事務局長　葦原円花
制作　小島寛大、河合千佳
喜友名織江、十万亜紀子、荒川真由子、砂川史織、松嶋瑠奈、
松宮俊文、横井貴子、岡崎由実子、三竿文乃
広報・営業　長原理江、横川京子
経理　堤 久美子、谷口美和
総務　平田幸来、蓮池奈緒子、一色壽好
チケットセンター　佐々木由美子、佐藤久美子

技術監督　寅川英司
技術監督アシスタント　河野千鶴
照明コーディネート　佐々木真喜子(株式会社ファクター)
音響コーディネート　相川 晶(有限会社サウンドウィーズ)

アートディレクション　氏家啓雄(有限会社氏家プランニングオフィス)
メインビジュアル　naomi@paris,tokyo
ウェブサイト　竹下雅哉(有限会社氏家プランニングオフィス)
広報　株式会社 フロンティア・エンタープライズ
広報協力　湯川裕子
海外広報・翻訳　ウィリアム・アンドリューズ
物販　渡辺 淳
票券　株式会社ヴォートル
執筆・編集　鈴木理映子
中国トーク 企画・コーディネート　小山ひとみ

インターン　浅利瑠璃、穴迫 楓、上原彩加、大野ちはる、大橋桃奈、尾崎夏美、金山咲恵、
川縁芽偉子、北原七海、久木野実玖、胡 瀾、合田桃子、佐藤 凌、鈴木里咲、
多田彩華、千葉ゆり、中條 愛、鄧 詩瑤、都丸杏樹、西本万耶、比留間晴子、
細井優花、松村亜矢、儘田章子、三友遥菜、山本菜絵、吉田明理、林 嘉琦

■ Festival/Tokyo Executive Committee

Advisors:
Man Nomura (Chairman, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh actor)
Yoshiharu Fukuhara (Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.)
Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano (Mayor of Toshima City)
Chair of the Executive Committee:
Hitoshi Ogita (Adviser to Board, Asahi Group Holdings, Ltd.)
Vice Chair of the Executive Committee:
Sachio Ichimura (Director, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ])
Akira Kurihara (Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City)
Akira Touzawa (Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation)
Committee Members:
Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation)
Sumiko Kumakura (Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts)
Yukihiro Saito (General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.)
Atsuko Suzuki (General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd.)
Masami Suzuki (Chairman, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima)
Taeko Nagai (Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute)
Kouichi Ozawa (Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section)
Masato Kishi (Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation)
Naoko Hasuike (Representative, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ])
Hirotomo Kojima (Board Member, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ])
Supervisor: Sayoko Suzuki (General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City)
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

■ Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat

Directors Committee
Representative: Sachio Ichimura
Deputy Representative: Hirotomo Kojima, Chika Kawai
Members: Madoka Ashihara, Orie Kiyuna, Akiko Juman, Rie Nagahara, Masahiko Yokobori

Administrative Director: Madoka Ashihara
Production Co-ordinators: Hirotomo Kojima, Chika Kawai,
Orie Kiyuna, Akiko Juman, Mayuko Arakawa, Shiori Sunagawa, Luna Matsushima, Toshifumi Matsumiya,
Takako Yokoi, Yumiko Okazaki, Ayano Misao
Public Relations, Sales & Planning: Rie Nagahara, Kyoko Yokokawa
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Miwa Taniguchi
Administrators: Saki Hirata, Naoko Hasuike, Hisayoshi Isshiki
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kouno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction & Design: Yoshio Ujiie (Ujiie planning office)
Main Graphic Design: naomi@paris,tokyo
Website: Masaya Takeshita (Ujiie planning office)
PR: Frontier Enterprise Co., Ltd.
PR Support: Yuko Yukawa
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Ticket Administration: Votre, Ltd.
Writing & Editing: Rieko Suzuki
Chinese Theatre Talk Planning & Co-ordination: Hitomi Oyama

Interns: Ruri Asari, Kaede Anasako, Ayaka Uehara, Chiharu Ono, Momona Ohashi, Natsumi Ozaki,
Sakie Kanayama, Meiko Kawabuchi, Nanami Kitahara, Miku Kukino, Hu Lan, Momoko Goda,
Ryo Sato, Risa Suzuki, Ayaka Tada, Yuri Chiba, Megumi Chujo, Deng Shiyao, Anju Tomaru,
Maya Nishimoto, Haruko Hiruma, Yuuka Hosoi, Aya Matsumura, Shoko Mamada, Haruna Mitomo,
Nae Yamamoto, Akari Yoshida, Lin Chia Chi